
忍天狗【第二部】

八尾メチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍天狗【第二部】

【Nコード】

N5373V

【作者名】

八尾メチル

【あらすじ】

時は昭和初期。華やかな時代は未曾有の不況によって打ち切れ、長い戦争の序幕が上がる——其処に生きるのは鬼か、人か。殺人の業を背負った一人の忍びを中心に、歴史の裏側を駆け、忍天^{しのびて}狗と呼ばれた一族の群像劇。

*シヤレにならん位登場人物が死にます

*魔法妖術系はほぼ出てこないですが呪いみたいなのはあります

【第二部】が本編です。【序部・第一部】（シリーズ投稿完結済）

序「1/2」(前書き)

第二部スタートです。よろしくおねがいしますー

序「1 / 2」

序・1932 冬の海

「序 - 1 / 2」

身を切るような寒さだ。曇天の下、揺れる船舶の上で、三重子は濁った海を見つめていた。このままここを飛び降りたら、どれくらい楽に死ねるだろう。

この船は三重子の故郷八戸を去り、銚子へ向かっていた。身売りの船である。冷害と、昭和に入つてすぐの恐慌に見舞われた農村では、もはや娘しか売れるものがなかったのだ。三重子の家も同様である。小学校に行くこともできず働いていた三重子も、人買いに買われて船に乗っている。

甲板にはぽつりぽつりと、三重子と似たような粗末なりをした、呆然と海を眺める少女たちの姿があつた。彼女たちもこれから売られていくのだろう……三重子の背に、声がかかる。

「お嬢さん、こんなところにおれば風邪を引くよ」

それは、腰の曲がつた老婆だつた。ぼろぼろの着物に薄い羽織をつけ、杖を頼りによるよと立っている。歯の抜けた口が歪み、長く折れ曲がつた鼻の下で笑みを形作つた。

「あんたも、東北の村の出かね」

「はい……八戸です」

「何処へ行きなさる？」

「それは……分かりません」

何処へ行かされようと、元より三重子に選ぶ権利などないのだ。老婆は皺くちやの口元を動かして喋つた。

「若い身空で難儀じゃな。……いや何、年寄が独りでこんな船におつても暇なんじゃ。少し話し相手になつてもらえんかな」

「え……ええ、いいですよ」

すし詰めの特等客室に戻つたところで、同業者としゃべくる人買

いの隣の床に座して、黙り込むくらいだ。

老婆はミキと名乗った。田舎から出て、東京にいる息子のところに身を寄せるらしい。配偶者がこの秋口に亡くなって、どうにも生活していけなくなったのだという。

「どこもかしこも冷害で稲がやられてちまって、まず食う飯がねえだろ。おまえさんのご実家も似たようなもんじゃないかい」

「うちには……下のきょうだい五人いて。弟妹を食わすためには、おめが働きさ出るしかねえと両親に言われました」

「それで売られたってかい。……おまえさんの親御も気の毒にな。ほれ、これでも食わせ」

ミキが糲^{ほし}を差し出してくる。船に乗る前から何も口にしていなかった三重子は、喜んで食べた。干した飯でも、白米を口に運んだのはいつぶりだろう。

しかし間もなく雨が降ってきて、三重子はミキと共に船内に戻った。

隣の人と肩と肩が触れ合う。揺れる真つ暗な船底で、三重子は精一杯身を縮める。大きな揺れのせいで、三等客室にあった灯りが消えてしまったのだ。何も見えない闇の中、三重子に伸びる手がある。三重子は反射的に身を掬ったが、人が多すぎて逃げる事が出来ない。三重子に触れた腕の主はこう言った。

「へへ、いいじゃねえか」

下卑た笑いに三重子はぞつとする。なんとか腕を引きはがそうとするも、その手は肩を、腰を、尻を掠めていく。おぞましい。三重子は体を震わせ、必死に言った。

「やめてください、やめて」

「おめ、人買いが連れてた娘だろ。売られてったさきじゃこういうことをするんだよ、今から馴らしとかなきゃな、へへ」

男の生ぬるい息が耳朵を打つ。その気味悪さと言葉の内容に、三

重子は恐ろしさに動けなくなってしまった。両親は、どこかのお屋敷に女中として奉公しに行くのだと言っていた。なのに。

胸を鷲掴みにされ、三重子のはか細い悲鳴を上げる。すると、絡みついていて腕が乱暴に離れていった。

「やめなさい、こんな娘さんに」

涼やかな声が響いて、暗闇が晴れた。ランタンに火が灯されたのだろう。

三重子は、着物姿の青年を目の前に見た。彼は三重子を庇うように背に回すと、毛深い腕を所在無げにして歯噛みしている男を睨んだ——こいつが、三重子をまさぐっていた犯人らしい。

青年は三重子の腕を掴むと、立ち上がった。

「こっちに」

「えっ……あの」

連れ出されるがまま、甲板に出る。雨は小降りになっていた。

あらためて見る青年はすらりと背の伸びた、美青年だった。生娘の三重子は思わず紅潮する頬を押さえる。それくらい、整った顔だった。

「嫌な奴がいたもんだね。大丈夫かい？」

「え……あ、はい」

「きみ、八戸から乗ってきた子だね」

「ええ……」

青年は破顔した。

「僕も八戸出身なんだ。函館から乗ったんだけどね、仕事帰りで」

三重子のこと何となく気になって、見ていたのだという。そのうちに雲行きが怪しくなってきたので、ついつい助けてしまったと。「余計な世話だったかな」

「いえ！ おかげで……助かりました」

三重子は頭を下げる。もともと、男の腕の嫌な感触は抜けない。それにあの言葉も——“売られた先でもこういうことをする”。

暗い顔になった三重子を、青年が覗き込んだ。

「顔色が悪いよ? …… もう少し、ここで風に当たっていった方がいい。では、僕は戻るから」

「あ、あの!」

思わず、三重子は声をかけてしまった。首を傾ぐ青年に、はにかみながら言う。

「良かったら……話し相手になってもらえませんか」

青年は顔をほころばせると、喜んで、と応じた。

仙馬雅之と名乗った青年との会話はよく弾んだ。しかしそのうちに、話題は三重子の身の上に移っていく。三重子はどんどん暗い顔になっていった。

「そうか……銚子へ行くんじゃないあ、たしかに売られる先は酌婦か娼妓だろうな」

雅之の正直な言葉に、三重子は俯く。それらが春を売る職業であることを知らぬほど、三重子は子供ではない。

しかし、雅之は意を決したかのように頷くと、こう告げた。

「三重子さん。あんたに覚悟があるのなら、どうにかならないわけではない」

「えっ、本当ですか」

「ただし」

声を低くして、雅之は続けた。

「相当危ない橋だ。あんたが一緒に渡ってくれるなら、だが……」

目を覗きこまれ、三重子はまた顔を赤くする。

「雅之さん……」

「どうだい、三重子さん」

「わりに……出来ることでしたら」

「そうか」

雅之は顔をほころばせた。綺麗な笑みだった。

しかし、出てきた言葉に三重子は顔を強張らせる。

「簡単なことだ。三重子さんを買った人買いを殺せばいい」

「えっ……」

真っ青になった三重子の肩を、雅之は掴んだ。

「あいつがいなければ身売りをしなくても済む。何なら僕があんたの身を引き取ってもいい。どうだい、でもあいつがいる限り、あんたは鉋子でさつきより酷い目に遭うんだぜ」

「でも人殺しなんて……」

躊躇う三重子に、雅之は頷いた。

「すぐには言わないよ。覚悟が出来たら……出来なきゃ、それでいい」

三重子は、弾かれたように雅之を振りほどくと、三等客室に戻る。階段を降り、行き着いた地下の部屋の手前で、三重子は二の腕を捕まえられた。

「痛っ……」

「おいおい、こんな狭い船の中で、逃げられると思ったかよ」

そこにいたのは、先の無体を強いてきた男だった。三重子は震えあがる。触れられた場所から、腐っていくかのような感覚だった。

「いやっ！」

「おい、大人しく、しろっ！」

狭い廊下を、より暗いほうへ引いて行かれる。船の動力の音がうるさくて、三重子の悲鳴は誰にも聞こえていないようだった。

そのとき船が大きく揺れた。いきおい投げ出され、三重子を掴んでいた男の腕が離れる。その隙に、三重子は転がるように階段に向かった。

「待ちやがれ！」

そう叫んだものの、男は階段の上まで追っては来なかった。覗き込む雅之の顔が見えたからだろう。

「雅之さん！」

三重子は雅之に飛びついた。彼は驚いているようだったが、階段の下から慌てて逃げていく男を見て険しい顔をする。

「しつこい奴だな」

「雅之さん、さっきの話……わらはやります」

触られるだけであれほどの怖気が走るのだ。この先を考えたら気が狂いそうになる。死んだ方がましだろう。

「何だつてやります……だから、だから」

「うん……分かった。大丈夫、僕の言う通りにすればいいだけだ」

三重子を抱きながら優しく髪を梳く雅之が、今は救世主のようだった。

「おや、お嬢さんじゃないかい」

船底に戻った三重子に声をかけたのはミキだった。老婆の優しい声に、三重子は曖昧な笑みを浮かべる。客室の扉の前までは雅之と一緒にだったが、人買いに見つかることだから、と彼はまだ外にいるはずだ。

ミキがいるなら、あのいやらしい男も手を出してこないだろう。

三重子はすとんと老婆の隣に腰を下ろした。長い鼻を揺らして、ミキが笑う。

「長らくこんなところにいたら、気分が悪くなるさね。少し、甲板に出てこようかねえ」

三重子は今行って戻ってきたところだが、ミキと同意見だった。

何より誰か——男以外の——と一緒にいたかつたし、“計画”の概要を雅之から聞かされて、後ろ暗い気持ちになっているのもある。

三度出た甲板で、三重子は堪えきれなくなった。

「おばあさん、しばらくここにいてくれませんか」

「うん？　どういふこつたね、それは」

ミキはそこで、三重子の様子が切羽詰っているのに気付いたようだった。

「何かあったのかい？」

不安が三重子を押しつぶさんばかりになっていた。元より三重子が背負うには、重すぎる役目なのだ。それを免罪符にするように、三重子は口を開く。

「実は数刻後、この船は爆破されるんです」

「何だつて？」

「船底の、客室が標的になってるんです。おばあさん、甲板にいたら助かるかもしれません。だからおばあさんだけでも……」

「お待ちよ。一体全体、どうしてそんなことになっちまってるんだい？」

皺くちやの顔をさらに歪め、ミキは素っ頓狂な声を上げる。

「詳しくは言えませんが……」

三重子は、特段ミキだけを助けたかったわけではないのだ。

ただ、自分のせいで巻き込まれ犠牲になる人を、一人でも何とかしようと思ったただけなのだ。

それが、裏目に出る。

「言えないって……そんなモン、わしだけ助かったってそうはいかないよ。いたずらにせよ何にせよ、船員さんに知らせなきゃ。なっ？」

「そ、それはもつと駄目です！」

走り出そうとするミキの細い手を、三重子は掴んで止める。

「何で止めるんだい」

「駄目です、駄目なんです！」

そんなことをすれば、人買いを殺せなくなってしまう。三重子は売られてしまう。

小雨の降り注ぐ甲板を、揺れる吊りランタンが怪しく照らした。ひゅうひゅうと風が鳴る。そのとき、船体が大きく揺れた。

「わわっ」

ミキが体勢を崩す。それにつられて、三重子は滑って転んだ。三重子の束縛が緩む。ミキがその隙に、走り出す。

「駄目！！」

三重子はそれを追って駆けだした。

ミキの曲がった腰にぶつかるように体当たりする。軽い老婆の身体が宙に浮いた。

「あっ」

ミキの腰から上が柵に引っかかる。揺れた拍子に、それが外に押し出されようとするのを、三重子は慌てて追いかけた。

かんかんという警鐘らしき音が響く。ミキは歯を食いしばって、甲板の柵を掴んでいた。既に身体は柵の向こう側にある。三重子はその傍に近づくと、傾く船体の上で踏ん張った。

「ひっ……ひいっ」

助けるべきか、否か。

三重子は体を撫でる、男の腕を思い出した。

——いや。いやだ。

腕を振り払うのと同じ、反射的な行動だった気がする。三重子はミキの手を蹴った。老婆の指は柵を離れ、船体の側面を転がり、海に落ちていった。

「あ……」

黒一色のそれにミキが吸い込まれていったその瞬間、三重子を激しい後悔が襲う。

なんてことをしてしまったのだろう。

それと同時に、もうあとには退けないのだという思いが波のように胸に迫った。やるしかない、やるしか。

三重子は漆黒の海を見下ろす。そこにはもう、何の面影も映ってはいなかった。

序「2 / 2」

序・1932 冬の海

「序 - 2 / 2」

船底に戻った三重子は、雅之に命じられたとおりに行動した。出来ることならもう一度雅之に会っておきたかったが、見える限りに彼の姿はなかった。人買いに時間を訊くと、約束の時刻までわずかに迫っていた。

手水に行くと言って人買いの隣から立ち上がる。しかし、その手を買いが取った。

「さつきから何度もどこかに行ってるが、何をしている？」

「わ……わら、気分が……」

青い顔で口元を押さえる三重子を、人買いは船酔いと思ったらしかった。手が離される。

甲板に上っていきながら、三重子は人買いに握られた手首を払った。いやだ。これもいやだ。

船員の目を盗みながら、雅之に指定された複雑な道を進んでいく。もう既に、客が立ち入れる場所ではないのは、船に詳しくない三重子にも分かっていた。

「ここ……かしら」

動力の音が非常に近い。屋外ではあるが、一等、二等客室のある部分の裏手、三等客室やボイラー室の真上あたりに三重子はいた。三重子がここでするべきは、仕掛けられている爆弾を爆発させることだけ。その起動レバーを、三重子が引くだけ。

懷に隠しておいた、レバーの先を取り出す。これが上手く一致するところに嵌めてやって、捻るだけだ。

三重子はそれを探そうと膝をついた。

「おっと、そこまでな」

かかった軽い男の声に、はっと息を呑む。

振り返ると、ランタンを持った男がいつの間にかそこに立っていた。男と言っても――随分若い。三重子とあまり歳は変わらない少年だ。ずぶ濡れの長い髪に女物の着物から女性のように見えるが、態度や声がそれとは違う。

「爆弾への案内、ご苦労さん。もう船底に戻った方がいいよ」

少年は髪で半分隠れた顔を、にいと歪めた。

「それを爆発させたら、客室全部諸共あんたも一緒に吹き飛ばぜ」
「え……」

「爆弾なんか用意する周到なやつが、なんであんたをわざわざ使うのかも考えなかったのか？ あんたを生贄にして逃げおおせるつもりだったのさ」

「そ、んな、じゃあ、雅之さんは……」

「まあ、逃げられるはずもなく」

少年は自分の後ろの柵に繋がった紐を引いた。何かがぶら下がっている。少年が近づけた灯りに照らされたものを見て、三重子はひつと息を呑んだ。

それは、雅之だった。顔を赤黒く腫らしている。すぐ目を逸らせたが、どうやら柵で首を吊られているようだ。

少年はゆっくりと片手を差し出す。

「諦めな。さ、そいつをこっちに寄越すんだ」

「わ、わらは……どうなんだ」

「どうにもしねえ。船に乗る前と、何も変わらない」

「やだ！」

反射的に、三重子は叫んだ。叫んで、レバーを抱きしめる。これだけが最後の頼りであるように思えた。

「売られるのはやだ……恐ろしい、やだ……」

「じゃ、爆発させて死ねばいい。二つに一つだ」

「助けて！」

少年に向かって三重子は絶叫する。何かがふつと切れたようだった。

「なして、わらが……わらさ、嫌だったただけだ。それが……ただ……」

「気の毒だとは思うがよ。ま、自業自得だ。婆さん突き落したのは言い訳のしようがないしな？」

三重子は目を見開いた。まさか、見られていたのか――

否、少年は三重子を覗き込むと、左半分の顔で嗤った。

「おかげで死ぬかと思ったさね」

少年のものでない、酷くしゃがれたその声に、三重子はその場へたり込む。

間違はなく、ミキの声だった。

少年は三重子が落としたレバーの先を拾い上げると、肩を竦めた。
「あんたのおかげで爆弾事件は未遂になった。ま、それでお相子としようや」

次の日の朝、蒸気船は無事銚子港に到着した。

「結局、このまま降りちまって構わねえのかね？」

下船していく人を甲板から見下ろしながら、少年は後ろを振り返らずに尋ねた。そこに人影はないが、声だけが風に混じって応じる。
「いちいち、下船する三等の客の顔を確認したりしませんよ」

「それもそうだ」

海に落ちた時、奇跡的に仲間に見つけてもらって助かったはいいが、変装小道具は軒並み流れてしまった。下船した町で、またいろいろと買い込まねばならない。

どうにも、潮風がべたついて仕方がない。髪に隠れた右目をしばしばやると、少年はひらりと甲板から船の裏手へ飛び降りた。着地した先にいたのは憲兵服を着た陰気な男。これを、と彼は藻のついた何かを手渡してくる。

それは、面だった。ミキに扮するため使ったものだが、小細工が流れ落ちて地が出てしまっている。少年はぱつと表情を明るくした。

「おお、ありがとう。というかよく拾えたな」

「あなたを海から回収するとき、たまたま船体に引っかかっていたので預かっていました。大切な物で？」

「先代の形見だよ」

鼻の伸びたいかつい顔に、額には小さなこぶが二つついている。

鬼天狗の面だ。

憲兵服の男は特に感慨もなさそうに話題を変えた。

「ところで、狗堂どの」

乗客に混じって下船しながら、会話は続く。

何となく、嫌な予感がした。

「おい、着いたばかりですみませんが次の仕事です、とか言っんじやなかるうな」

「よく分かりましたね」

少年は顔をしかめた。

今回の“おつとめ”は、過激派たちに目の敵にされている、とある議員の護衛から派生したものだ。お忍びで彼が青森へ慰問に行った帰りの船に、出航間際で、暗殺者が乗っているかもしれないとの情報が入ったのである。狙われているのだからそもそも遠出するなと思うが、行ってしまった帰りのだから仕方ない。それも暗殺者は忍天狗上がりだというから、たまたま別任務で八戸にいた始末役の少年が同乗することになった——乗客のどれが暗殺者かも分からずにだ。

全くの手さぐりだった。敵が自分から尻尾を出してくれたおかげでなんとかなった。少年にしてみれば、とばかりで危うく死ぬところだったのである。

「夜の字、当てずっぽうで船に乗せたわりに手が早いじゃねえか。

さては、こつちが本題だったな？」

憲兵服の男——猿國夜彦は帽子に手をやり、涼やかに応じた。

「狗堂どの、我々の仕事に詮索は無用ですよ」

「死ぬ前に聞かされてりゃな、死ななくて済む話もあるんだ。今回

みてえにな」

「あなた、死ななかつたではありませんか」

「結果論だろ！」

少年は吼える——も、無駄だと思つて声を潜めた。どのみち忍び言葉である、港に人は多いが、忍天狗同士のこの会話は、彼らには全く聞こえていない。

「それで？ 今度はどんな厄介事だ」

「おや、前向きですね」

「せざるをえねえだろうがよ……分かつて言つてやがるのか」

「ええと、これを」

睨む少年を避けて、夜彦は一枚の切符を差し出した。汽車の物である。

「帝都行き？」

「狗堂どのの所屬が帝都に定まりました。東京へ行ってください」

夜彦の言葉に、少年は不審を覚える。

「東京府管轄の始末役は、獅子崎のおやっさんだったろ。どうしたんだ？」

「まあ……詳しい話は着いてからということ。私は別件の用がありますから、これで失礼します」

「あ、ちよつ」

人ごみに紛れて、夜彦は去つていつてしまった。

雑踏に一人残された少年は、もう一度切符に目を落とし、呻いた。出発日は二週間後、とある。

財布ごと海に落ちたので、少年は今文字通り身一つだ。変装用のぼろぼろの着物はさすがに着替えて普通の男物の袴をはいているものの、何か路銀に代わるものを持っているわけでもない。

「なんでえ、この上乞食のふりでもしろつてのか……」

頬を引きつらせると、少年——狗堂煬介すけいけは肩を落とした。

「1 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「1 / 9」

五年の月日は、煥介の生活を、全てを大きく変えてしまった。

そのほとんどを忍天狗としての修業——諜報、変装、そしてもちろん武の訓練も——に費やして、ほんの半年前に一人前として認められ、煥介は独り立ちをした。すなわち正式に、始末役目の狗堂を襲名したのである。以来、まるで巡業のように日本各地を転々とする日々が続いたが、ようやく帝都に管轄が定められたというわけだ。

それにしても——汽車に揺られながら、煥介は考える。前の東京府管轄の始末役である獅子崎という男は、煥介の師の一人でもあった。すなわち、始末役の何たるかを彼に教えた先生である。連絡役である夜彦は多くを語らず、また結局汽車の日時になっても現れず仕舞いだったが、果たして獅子崎を殺るような相手が今回の敵なのだろうか？

「わあ、おうちがいつぱい！」

四人掛け座席の、煥介の正面に座していた男の子が窓に張り付いて歓声を上げる。それを窘めた保護者らしい老人と目があい、会釈してくる。煥介は微笑んだ。

「東京は初めてで？」

「ええ、この子は」

「実は自分もなんですよ。だから、その子のはしゃぎっぷりはよく分かる」

少年と同じように窓の外を眺めると、背の高い建物が所狭しと並んでいる様子が見えた。時折覗く広い道路には車が行き交い、着飾った人たちが闊歩している。さすがは帝国首都、ここまで大きな街を、煥介は見たことがない。

「これ、いい加減にせぬか」

座席に上つて飛び跳ねていた少年を、老人はきちんと座らせた。少年は煬介の視線に気づくと、ちらりと舌を出す。煬介は笑って応じた。

「坊主、じいちゃんは大事にしるよ」

言つてやると、少年はきよんとした。

「ねえ、御存じ？ 西田さん、行方不明なのですって」

授業も終わり、女学校の校門をくぐりながら口元を押さえながら寄ってくる級友に、少女は曖昧な笑みを返した。

「どなたが仰つたの、それ」

「あら、学校中に広まっている噂のようよ。だってもう一週間もお休みなんですもの、お見舞いに行かれた方も、西田さんにお会いできなかつたんですって」

級友は断髪したおかつぱの髪を揺らして、足早の少女を追いかけってくる。一方で、少女の方は長い艶やかな髪を翻すように振り返つた。

「いやあね、それだけでどうして行方不明と決めつけるのかしら。ひよつとすると、深刻なご病気なのかもしれないのに」

「それがね、昨晚、西田さんを見たって子がいるのよ」

級友は世間話をするおばさんのように手をくねらせた。華族の血を引くお嬢さんにしては、庶民的な素振りだ。声を潜め、彼女はこう続ける。

「夜半に公園を抜けて、怪しい男たちに連れられてどこかに行くのが見えたそうよ。街灯に照らされるその横顔は、それはまあ真っ白で……」

「あら、どうしてその目撃者は、夜半に公園なんてところにいたのかしら」

少女がそう返すと、校門を抜けたところで級友は頬を染めた。

「そんなの、決まっているじゃないの……女学生が夜に逢瀬を重ねるといったら、答えは一つよ」

「先生に知れたら懲罰ものよ」

驚いて言うと、級友はむっとしたようだった。

「ロマンティックというものが分かっていないのね。まあ……日野さんはあの美形な婚約者がいらっしやるから、興味が湧かないのかもしれないけど」

「そういうつもりじゃ……」

だいたい、婚約者は関係ない話だ。

しかし級友は自分で口に出しておきながらさらに腹が立った様子で、つんと澄ましている。

「ねえ、でも西田さんは心配だわ。お見舞いに行きましょう?」

ためしに、少女は級友にそう呼びかける。級友はちらと少女を一瞥した。

「そうね……たしかに、噂は自分で確かめるべきよね」

「噂というか。西田さんのご加減だけでも、知りたいわ」

少女が言うと、級友はうんうんと頷いた。

「それじゃ、早速今から西田さんのお宅にお伺いしましょうか」

「ええ! ……あつ」

そこで少女は、この後の予定を思い出した。

確か今日は、婚約者が家にやってくる日だった。

「どうかした?」

級友の問いに、少女は思い出した内容をぶんぶんと首を振って打ち消す。

「何でもないわ」

——忘れていたと言えはいいのだ。

憂鬱なことを頭から振り払い、少女は明るく微笑んだ。

煬介が駅に着くと早速、聞き馴染んだ声が降った。

「火に入る虫の言伝に」

「きつちり二週間放置しやがって」

コンコースを進みながら煬介は憎まれ口を叩くが、涼しい声は動じない。

「そのわりに、綺麗な身なりですね」

「あつてめえ、俺が一文無しなのを知ってたな！……親切な漁師一家に居候させてもらったんだよ。それはそうと、こっちはどういう塩梅だい」

「よくはありませんね。……いえ、正直に言いましょう。悪いです」
夜彦の声はきっぱり言い切った。煬介は眉を上げる。

「追い込みは帝都内です。それ以上範囲を狭められなかったどころか、既に複数犠牲者が出ていて、包囲網そのものが瓦解しかかっています」

「何だそりゃ。敵は複数なのか？」

「忍天狗は三人ですね。外部から仲間を得ている可能性もあります」
が

駅の入り口を出たところで、憲兵服を見つけた。夜彦は煬介を確認すると肩までの外套から紙を出す。すれ違いざま、煬介はそれを受け取った。

包囲網が帝都内ということ、今、ここでも敵がこちらを観察している可能性がある。味方との接触も、可能な限り避けるべきなのだ。

「始末対象の目録です。ではまた」

道路を渡り振り返ると、丁度目の前を洒落た車が走っていった。そのあとに夜彦の姿はない。

相変わらず愛想もそっけもないやつだ。進行方向に向き直った煬介は、目録の中身を確認する。

そこにあつた名前に、瞠目する。

「おい、これ——」

思わずまた背後を見るが、勿論そこに夜彦の姿はない。煬介は舌

打ちした。怒りにまかせて手の内で紙を丸めて口に放り込む。通行
人が驚いていたが、知ったこっちゃない。

目録の一番上には、獅子崎の名があつた。

「2 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「2 / 9」

東京の空は暗く淀んでいる。

車は引つ切り無しに行き交い、灰色の空気が目に見えるかのようだ。煬介は老婆の姿で道を進みながらごほごほと咳き込む。日が暮れてきた。

ただつひろい道の中心を路面電車が滑っていく。その傍を車や乗合自動車タクシーが通り過ぎ、そして道渡る人が縦に横切って走っていく。

煬介は忍天狗から支給された下宿で変装したのち、当てもなくぶらぶらと街中を彷徨っていた。大通りは洋装の人も多く華やかだが、裏通りは着流しでいても違和感がない。

それにしても……

石橋の途中で立ち止まり、煬介——ミキはため息をついた。

東京とは、なんと広い街であることか！

それに、とにかく人が多い。念のため老婆に扮してはいるが、よろよろと頼りないこの姿ではこちらからあちらへ行くだけで時間が瞬く間に過ぎてしまう。こんな調子で、標的の三人が仕留められるものだろうか？——夜彦はあえて、煬介を帝都に慣れさせるために仔細を知らせなかったのではと、邪推してしまう。

こんな調子で、あの獅子崎が殺れるのだろうか。

ため息が止まらぬ。彼らを見つけてくるのは自分の仕事でないとはいえど、敵が敵だ。すると。

「おっ？」

橋を渡り終えるミキの前を歩く青年が、左の路地に曲がる。

それはそうと、真っ直ぐ行こうとしたミキの行く手を阻むように、別の男が立ち止まった。

「あらら」

気づけば後ろからも人が来ている。仕方なく左の路地へ進むと、正面の青年につられていくうちに、だんだんと人気のないほうへ足を運んでいることに気づいた。

「あら、あら」

目に見える範囲で相手は三人——前に一人、隣に一人、少し離れて後ろに一人——である。

見事な誘導術である。このまま行けば、袋小路に追い込まれていくのだろう。

が、こちらが気付いた以上そう事は運ばせない。

ミキは途中で立ち止まると同時に地を蹴り、方向を変えて真後ろの一人に躍りかかった。

相手もそれは予想していたのか、深く被った傘の下の口元を引き締め、洋装の上着のうちに手を忍ばせる。だがそれを抜くより早く、猛然と彼に辿りついたミキは、懷に差したままの傘男の肘と二の腕を掴み、足を払いながら背負い投げた。その肘がへし折れる音。苦悶の声を投げ捨て、ミキは来た道に向かって駆けだした。

追ってくる足音がする間もなく、急に止まったミキの眼前を銃弾が通過していく。

見えぬ塀の上にもう一人——

四人か。

総人数が分かってしまえば、対処はたやすい。

仮面の内側で、煬介は目を細めた。

西田邸に伺ったものの、結局友人に会うことは出来なかった。

少女はため息をつきながら、家路を進む。一緒に訪問に行った級友とは道が違うので途中で別れた。今は表参道をとぼとぼ歩いている。このあたりは大きい通りだから人もたくさん行き交うとはいえ、もう街灯が点く時間帯だ。

近頃、帝都の治安もめつきり悪くなつてきている。件の恐慌のありでたくさんの人が職を失い、東北の方では酷い不作でその日の食べ物にも困っているらしいと父が言っていた。少女の父は造船業を一代でのし上がった所謂“成金”であるが、その工場も不況を受けて泣く泣く、従業員の首を切っているという。

家が裕福である少女は女学校にこそ通えているが、これからのことを考えると、手に職をつけるべきなのだろうか、と思つてしまう。勿論親は反対しているが、その言うとおり、卒業と同時に易々と結婚してしまうことこそ、少女にとっては最も避けたい道であつた。少女には軍人の許嫁がいる。彼はとてもよくしてくれているが、それは婚約者やその家族に対する義理立てのようなもので、恋人の持つ恋情は感じない。そして少女も然りだ。少女には、ずっと心に残している想いがたつた一つあつた。

「こらッ、その乞食！ そんなところで座り込むんじゃない！」
「ヒエッ」

何事かと目をやると、警棒を持った警察官が、街灯にしがみつくようにしゃがみこんでいる老婆を怒鳴りつけていた。哀れ、乞食の老婆は身を竦ませて立てない様子だ。

「わしゃ、孫に会いに來ただけじゃ。このあたりに下宿を取つておつてのう、しかし歩くのにくたびれて……」

「えい、だったらその場所にさつさと行かんか」
「ひゃあ」

尻を蹴とばされて老婆が飛び上がる。苛苛しているらしい警官に、老婆はよろよろ、立ち上がりながら唇を尖らせた。

「なあにを、そんなに力リ力リしておられるんじゃ。腹でも減つてるんじやろうか？ なら、糲が……」

「いらん！ ちょ、こら、どこから出してる！ いらんと言つに！」
老婆が差し出した手をはたき落した警官に、彼女はやれやれと眉をひそめた。

「東京はおまわりも怖いのもう」

「……いいか、田舎者のようだから教えておいてやる。この辺りは最近、物騒なのだ。やれテロか、ストライキか知らないけれども、連中、血気盛んに周りも見ずにやるものだから……つい先日 of 暴動なんぞ、死傷者も出ているのだ。だから婆さんとはいえ、女の独り歩きはよしなさい」

「あんた、怖いのか親切なのか分からんねえ」

「まだ言うかつ」

「あ、あの」

いい加減見かねて、少女は声をかけた。

「おばあさん、どちらまでいらっしゃるんでしょうか？ 私、このあたりに住んでいるので、ご案内できると思うんです」

「……おお？」

老婆は突如乱入してきた少女にしばし呆然としていたが、やがて警官を向いた。彼の方は、少女の顔を見て居住まいを正す。

「これは、日野のお嬢さん。どうも」

「お疲れ様です。こちらの方、ご案内しても？」

「ええ。では、本官はこれで」

あつさりと巡回に戻っていった警官に、老婆は目をぱちくりとした。

「お嬢さんはどういったお方かね」

「母方の祖父が、警察の偉いお役職だったんです。それだけ、あとは家の近くに交番がありますけど」

少女は老婆の目線に屈みこむと、重ねて尋ねた。

「それで、どちらに向かわれるおつもりだったんでしょう？」

につこりと微笑むと、老婆はきよとしたのち、欠けた歯を見せて笑った。

「ふー、やれやれ……」

ずっと腰を屈めっぱなしで疲れてしまった。下宿の狭い四畳半に

足を投げ出して、男に戻った煬介は深いため息をつく。

警官に絡んで情報を得ようとしたのだが、思わぬ邪魔が入ってしまった。名乗らなかつたが、あのセーラー服の女学生……美人だったなあ、とどうでもいいことが浮かぶ。疲れている。

煬介は痛む頭で、今日あったことを反芻していた。

路地裏で襲われた直後のことである。

三人が屍となったことを確認し、ミキは頭上を見上げた。

四人目がいたはずのそこは沈黙していた。手裏剣は喉をついたはずだ。滴る血の跡が、それを示している。

姿の見た三人は、体術にかけてはろくろく訓練も受けていないようなチンピラだ。おそらくこの場所にミキを引き込むこと、それだけが与えられた使命だったに違いない。

「あつさりしたものだな」

拍手の乾いた音。

袋小路の塀の向こうからだ。響いた声には聞き覚えがあつた。

「……もつともこんな破落戸じゃ、おめえは止められねえか」

「こんな老体に何の御用かえ？」

婆の声で返すと、相手は失笑した。

「わしとおまえの仲じゃねえか。演技はよせよ、煬介」

本名を呼ばれ、煬介はそれに従う。もつとも、姿かたちは老婆のままだが。

「久しいな、獅子崎のオジキよ」

「狗堂の坊主がもう一人前とはな、忍天狗もよっぱど人手不足と見える」

「あんたらのせいじゃねえのか。裏切つたんだろ」

「違う」

煬介の返しに、声——獅子崎は鋭く否定する。

しかし、続いた声は平静を装っていた。

「もつとも……今わしが何か言おうとも、負け犬の遠吠えに過ぎぬ

だろうがな」

「どういうことだ？ 何故、始末役のあんたが忍天狗を裏切れる」

獅子崎にも煬介同様、人質がいるはずだ。獅子崎は乾いた笑いを上げた。

「人間つてのはな、時々どうでもよくなるんだよ……そして一番大事なものが無くなった時、その時が一番強いんだ」

「あんたの人質——死んだのか」

「わしの事アいい。おまえのことだ」

「俺？」

「おめえも、こっち側にこねえか」

「断る」

獅子崎の提案を、煬介は一蹴した。

「おいおい、話ぐらい聞けよ」

「勧誘話つてのは大抵底が割れてんだ。俺がそっちにいったところで、俺に何の利があるって——」

「お前の姉貴は東京にいるぞ」

続いた言葉に、煬介は思わず息を呑んだ。

するとその気配に気づいた様子で、獅子崎が笑い声を漏らす。

「ほらな、聞いた方が良いだろ」

「なんで、あんたが姉貴のことを」

「そんなことアどうでもいいだろう。おまえがこっち側につくと決めたなら、姉貴の居場所も教えてやる。……まあ、下手な気は起こさねえこったな。既に知っているだろうが、こっちにいる始末役はわし一人じゃない」

「獅子崎のオジキ、あんた何を考えて……」

「忍天狗に喧嘩を売りたいと思ったら、いつでも来い。歓迎するぜ」
それきり、堀の向こうの気配は掻き消えてしまった。

監視役がついてきていることを予想して、その場の死体は放置してきたのだが、騒ぎになっていないところを見る限り思惑通り事は

運んだようである。

ということは、獅子崎が煬介に裏切れと交渉してきたことも、忍天狗に伝わっているはずだ。

獅子崎自身もあっさり煬介が寝返るとは思っていないだろう、しかし――

灯里の存在は、煬介にとってあまりに大きいものだ。でなければ、五年も人殺し商売をしていない。

忍天狗を信用して彼女の身柄を預けているものの、利用価値なしとみなした獅子崎たちが彼女を本気で殺そうとすれば、並大抵の忍天狗では防げないだろう。

そして何より問題となるのは、忍天狗側が、煬介を完全には信用していないという点だ。

煬介に監視役がついているのが最たる証拠だろう。恐らく東京に入ってからだが、獅子崎たちが、煬介に何らかの接近をしてくると予見しての監視だろうが、煬介の寝返りに警戒してのものともとれる。

忍天狗の状況は夜彦の言うとおり、かなり逼迫しているのだろう。人質の灯里がいるのに、煬介を東京に送ったことからそれは明らかだ。もしかすると、煬介以外に現役の始末役はもうほとんど残っていないのかもしれない――殺されるか、裏切るかして。なら、忍天狗にとっても煬介の動向は注視せねばならぬものはずだ。

煬介の選択肢は二つ。獅子崎側に寝返るか、寝返らないかだ。非常に端的だが、決断するにはまだ圧倒的に情報が少ない。

（まずは、オジキたちが何を目的に動いているかを知らねば。連絡役やオジキを通せば情報が偏る、可能なかぎり中立な情報が必要だ）肉食の獣のように、のそりと煬介は動き出した。

（ま、先に腹ごしらえだけだな）

例の警官からちよろまかした財布を手慰み、彼は口角を上げた。

「3 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「3 / 9」

下宿を出た煬介がふらりと立ち寄った狭い裏道でも、のぼりと電灯がうるさく自己主張していた。こつも看板が多くては、どの店に入ったら晩飯にありつけるのかも分からない。

「お兄さん、店をお探しかい？」

べたつく匂いを漂わせ、客引きの女が腕を絡めてくる。押し付けられた柔らかい感触に、煬介は相好を崩した。

「お姉さんの店に行ったら、サービスしてもらえそうだ」

「そりゃ、ねえ」

今まで渡った街にもこういう界隈がなかったわけではないから、煬介もカフェーの女給がしてくれるサービスくらい知っている。が、今はそれにチップを払うより、腹を膨らませる方に金を使いたかった。

「悪いけど、今度ね」

「あら、つれないねえ」

しなを作る女を軽くあしらひ、煬介は次の通りに足を向ける。

「おっ？」

目に入ったのは、女学校の制服だった。

見覚えのあるセーラー服の、少女がある一軒に足早に入っていく。あれはたしか、さっき近所を案内してもらった女の子が着ていたのと同じ制服だ。

女学校の生徒が、こんな時間、こんな繁華街に何の用だろう。何となく興味を引かれてその店に近寄る。すると若い男が三人くらい、まるで入り番のように立っていることに気づいた。着流し眼鏡に、職人風の印半纏しるしはんてん、小洒落た洋装と、てんではばらな三人組である。「はあ、客引きにしては色のない人たちだなあ」

思わず口をついて出た言葉に、印半纏の四角く厳つい顔が煬介を向く。

「俺たちは客引きじゃねえぞ」

「じゃ、どうしてまた店先で通行人を検分してるんで？」

「人数が足りないんだよ。仲間が一人来なくなっただんでね」

洋装が肩を竦める。こちらはどこか柔らかい雰囲気の間だ。それを、ハンチング帽の眼鏡が押しつけた。

「このさい、君でもいいや。……君、麻雀出来るかい？」

「マージャン？ 何だそりゃ、支那語か？」

「おいっ」

今度は洋装が眼鏡を肘で突く。小柄な眼鏡はよろめいたが、洋装も印半纏も渋い顔だ。

そこで煬介はぴんと来た。

「あつ、もしかして賭け事か」

やったことはないが、聞いたことがある。人差し指を立てると、洋装と印半纏はますます狼狽えた。一方眼鏡は目を輝かせる。

「なんだ、知ってるんじゃないか」

「いや、聞いたことがある程度でどんなものかは知らねえよ」

「いいよ、教えてあげるよ。興味あるんだろ？」

「まあなあ」

賭け事は嫌いじゃない。煬介が乗り気を見せると、それまで苦い色だった二人も表情を変えた。洋装が目の前の店を指す。

「なら、丁度いいね。これで四人だ」

「麻雀てのは四人でやるもんだからな。うん、大丈夫、簡単だからすぐ分かるようになるぜ」

もしかしたらカモに出来るかもしれない、と正直な顔には書いてある。煬介はにいと笑って見せた。

「お手柔らかに」

ものの数時間も経たぬうちに、煬介を誘った三人は音を上げた。

「ああー、もう勘弁してくれ！」

麻雀卓につつぷす印半纏は、相川という男だ。この近くで大工の徒弟をやってるらしい。

「きみ、本当に麻雀初めてなのかい？」

真っ青になりながら唇を震わせる洋装は、新藤という。立ち居振る舞いは三人のうちでも群を抜いて上品だが、帝国大学の法学部の学生だそうだ。

「はは……はは……」

から笑いをしながら麻雀牌をかき混ぜるのは、一番乗り気だった日下部だ。眼鏡の彼は一番年下で、文筆家の真似事をしながら生活しているらしい。

「とりあえず、賭けは俺の勝ちでいいんだよな」

じゃらじゃらと点棒を弄びながら煬介は言う。それに、威勢よく相川が起き上がった。

「いやいや、まだまだ！ もう半荘——」

「あんた、止しときなよ。このお兄さん、相当お強いようだし」

彼の肩をぽんと叩いたのは、雀荘の店主だ。歯ざしりする相川に、煬介はいい気分で破顔する。

「あー、それにしても腹減ったなあ」

楽しすぎて目的をすっかり忘れていたが、自分は晩飯を食いに来たのである。

すると、店主は紫煙で曇る下り階段を指さした。

「うちの一階は食堂だからね、そこで賭け分、飯食っていきやあいさ」

「そいつアいいな」

賭けに負けた三人もそうしてくれと言わんばかりの表情だったの
で、四人は揃って一階に降りる。

「改めて自己紹介だ。俺ア、相川源太。こっちのひよろいのが新藤裕次郎、チビの眼鏡が日下部直哉だ」

「俺は狗堂煬介。実は上京してきたばかりでね、右も左も分からないもんで、あんたたちが声をかけてくれて助かったよ」

笑顔で応じると、日下部が眼鏡を押し上げた。

「何処から来たんだい？」

「ここに来る前は銚子、その前は八戸に」

「東北か。出稼ぎかい？」

「ま、そんなものかな」

新藤の問いに頷くと、相川が苦い顔の前で手をひらひら振った。

「花の帝都って言うけどな、見る影もないくれエ不景気だぜ。仕事なんて見つかりやしねえ、その日食い繋ぐのでいっぱいだよ」
「近頃はそれに加えて物騒だしね……」

「外地の方は景気よくドンパチしているようだけれど、それにつられて内地の景気も良くはならないものかなあ」

「その、物騒だってのはよく聞くんだが、何か大きな事件でもあったのかい」

それとなく尋ねると、よく訊いてくれたと言わんばかりに日下部がテーブルから身を乗り出してきた。

「そりゃあ山盛りさ！……まずは一月の、桜田門事件。畏れ多くも天皇陛下を狙った暗殺未遂だ。続いてつい先月の前大蔵大臣暗殺事件。両方とも帝都であった事件なんだよ。信じられるかい？　その上、一月の方は外地人の仕業ってはっきりしてるんだが、二月の暗殺は日本人の仕業で、どういう組織の者なのかは完全黙秘してるんだ。不気味だろ？」

そこまです流れるような一言で言った日下部に、ゆっくり内容を呑み込みつつ、煬介は頷く。

「それにね」

日下部は、さらに迫ってきた。

「噂の域を出ないんだがね、なんでも東京じゅうで行方不明者が急増しているらしいんだ」

「……へえ」

今日行方不明者を増やしてきた身には、うしろめたい噂だ。

「といつても、自分の家族がいなくなつたとかでなく、近所の浮浪者が見えなくなつたとか隣の家の下宿生の姿がないとかいう類なんだけどね」

「それは行方不明というのかね？ 急に引つ越しただけかもしれないじゃないか」

「そうかもね。でも、そういう話をあちらこちらで聞くのだよ。怪しいと思わないか？」

眼鏡を光らせる日下部に、あきれたように相川が言った。

「オイ、よせよ。まったくおまえって奴は」

新藤が煬介に向かって笑みを浮かべる。

「すまないね、日下部君は街の噂が好きなんだよ」

「流行に敏感だと言ってくれたまえ」

そこに、四人の足元をでかいネズミが這つていった。新藤が女みたいな悲鳴を上げる。

「うわつ、ここは飲食店だろう！？」

「す、すみません。どっからかい迷い込んできたのかなあ」

捕まえようとする店の主人だが、ネズミは胴体にそぐわずすばしっこい。

煬介は席を立った。

「ご主人、厠はどこだい」

「その階段の裏に入り口がありますよ」

「ありがとう」

煬介が厠の扉を開けると、ネズミは吸い込まれるようにその内側に入り込んだ。

ぱたんと戸を閉じ、鍵をかけると、煬介は腕を組んで目を伏せる。
「で、何の用だ」

「火に入る虫の言伝に。状況は悪化しています」

澄ました男の声が、狭い便所に響いた。連絡役こと、猿國夜彦の声である。

「監視役が複数消えました。うち、一人は死体が見つかっています」
場介はうつすら目を開けるが、前にあるのは便器とネズミだけだ。
「つてことは残りも……」

「死んでいるかもしれませんがね。向こうも、本格的に動くつもりですよ。あなたが東京にやって来たからかもしれません」

「それで？ いちいち俺に報告するような内容でもないだろう」

「殺された監視役の代わりに、明日行ってもらいたいところがあるのです。始末役目でなくて申し訳ありませんが」

「いや、それは構わないけど……場所は？」

「藍立女学院です」

「女学校？」

聞き返すと、夜彦の声は、はいと答えた。

「ちょ……殺された監視役ってのはどういう立場だったんだ。陽忍だろ？」

「監視役については……まあ、明日新聞にでもあがるでしょうから、それを見てください」

「死体の回収はしなかったのか？」

「陽忍ですから、表の身分は一般人です。事件にした方が敵の立場は悪くなるでしょう？」

ネズミは壁を這い、窓の隙間に潜り込む。

「私はまだ仕事がありますので、詳しいことは明日午前八時に、女学院で。あとはよしなに」

言うだけ言うと、ネズミはさっさと夜の向こうへ消えてしまった。場介は窓を閉じると、アリバイよろしく用を足してから店の中に戻った。会話の弾んだ様子もない三人に問いかける。

「そういえば、藍立女学院ってご存知かい？」

「藍立？ ……藍立といえば、ここの娘さんがそうだったんじゃないかなあ」

「え？」

「おーい、ご主人」

新藤が呼び止めた店主に尋ねると、彼は首肯した。

「へえ、そうですが」

店主が指さしたのは、奥の席で給仕をしている娘だ。

「で、何が訊きたいの？」

「いや……」

目をぱちくりさせて、煬介は彼女を遠目に眺めた。

間違いない、この店に入る前に見た少女だ。着替えてしまっているが、あの制服は藍立のものだったらしい。

固まった煬介を、日下部が肘で突く。

「もしかして君、恋煩いかい！」

「へ？　ち、違う違う！」

「ムキになっちゃって、怪しいなあ」

「いや、俺は藍立がどこにあるのか教えてほしかったただだよ。明日の朝、近くに住んでる知人に用で——」

「なんだ。そういうことなら、僕が案内してあげるよ！」

どんと自分の狭い胸を叩く日下部に、煬介は目を丸くする。

「いや……早朝だし、迷惑だろうからそこまでは」

「大丈夫、僕は早起きだし自由業だから、時間の都合はつくんだよ。遠慮しなくて構わないさ！」

「そう言っておまえ、自分が女学校に足を運びたいだけじゃないのか」

茶を啜る相川の言葉に、日下部は渋い顔をした。

「よりリァリテイのある作品を作るには、取材も必要なのだよ」

「あ、否定しないのね……」

日下部が引き下がらなかったのと、相川と新藤が麻雀の雪辱戦を提案したせいで、結局煬介はこの店で夜明かしするハメになった。まった。

「4 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「4 / 9」

翌朝。

その日はどんよりと曇っていた。硬い蕾の桜が並ぶ、高い塀の向こうに立派な洋風の校舎が見える。日下部に連れられて門の近くまで行くと、昨日見た制服の女生徒たちが、門前に立つ教師に挨拶をしながら固い表情で足早に学校へ入っていく様子があった。

「これは……大ごとだね」

日下部が持つのは今朝早くに配られた号外だ。

行方不明だった藍立女学院の生徒が公園で、見るも無残な姿となつて見つかった、とある。一面の写真に死体は写っていないが、文面にはこれが如何に異様な殺人であるかが書き立ててある。描写からして猟奇殺人だ、と誰もが思うだろう。だが煬介は真実を知っている。これが、争いの果てに敗れた忍天狗の末路なのだ。

殺された監視役は女学生だったのだ。冷静に考えれば驚くことでもない、煬介の姉もそうだった。

しかし忍天狗とはいえ大した技能もない小娘一人を、みせしめのように殺す獅子崎たちには胸が悪くなる。

「ちよつと、ここで何をしているの？」

突然かかった声に、煬介と日下部は首をすくませた。

振り返ると、仁王立ちにきつい顔をした藍立の女生徒が立っていた。その顔に、煬介はあつと声を上げそうになる。

昨日、道案内をしてくれた娘だった。しかしそのときの煬介はミキの姿だったので、面識があることを彼女が知る由はない。

「いや、僕たち、この近くのお宅に少し御用が」

居住まいを正しながら日下部がしどろもどろに言う。少女は検分するような目つきだが、同級生が惨殺された翌朝となつては無理も

ない。

「あなた、新聞の人？」

「記者みたいな無粋の輩と一緒にしないでくれたまえ。僕ア、同じ取材でも志高いんだ」

「新聞記者でないのに、取材？ 怪しいわね」

「ますます渋い顔になった少女に、日下部はいやいや、と焦って否定するように首を振る。

「怪しいものじゃないよ。作家なんだ。僕は日下部直哉。こっちの青年は僕の友人で、狗堂煬介」

「えっ？」

そのとき、少女の顔色が変わった。

日下部を睨んでいた目がぱっと見開かれ、見つめる対象を煬介に変える。ずいっと近づいてきた少女に、思わず身を引いた。

「な、何か？」

「も、もしかして……あなた……」

少女は唾を呑むと、興奮した様子でこう続けた。

「ねえ、もしかするとあなた、伏雁村っていうところに住んでいたことはない？ それで、お祖父さんとお姉さんと暮らしていたなんてことはないかしら」

煬介の幼いころの境遇を言い当てる少女に、煬介は驚きつつ否定も肯定もしない。呆気にとられていたというのが正確だが、上手く伝わっていないと思ったのか、少女は少し考えるような間をおいてこう言った。

「じゃ、私のことは？ 私、日野紫^{ゆかり}っていうの」

今度こそ、頭を殴られたような衝撃が煬介を襲った。

期待に目を輝かせて、自分を見つめる少女は今何と名乗ったか？

——紫、それは紛れもなく煬介の幼馴染の名だ。

つまり、この目の前にいる少女は——

「あ、あれ？ お二人は知り合い？」

話についていけない様子の日下部の言葉に、煬介ははっと我を取

り戻す。

「い、いや違う」

即座に否定した。少女——紫が傷ついたような表情を浮かべる。肯定してはいけない。強い抑止力が、煬介の口をついた。

「俺は八戸市の出だよ。伏雁村なんて、聞いたこともない」

「そんな……」

十年も経つのだ。煬介も当時の紫の顔はほとんど覚えていない。

だが、煬介は紫から目を離せずにいる。紫は、きつと眦を上げると煬介の襟首を掴む。

「そんなはずないわ。本当に違うの？　今あなた私の言葉に驚いてたじゃない」

「そりゃ、あんなだけまくしたてられりゃ誰だってびっくりするさ」

「じゃ、生年月日は。家族の名前は？　隣に住んでた母子の名前は、憶えていない？」

忘れるはずがない。

だがここで嘘八百を並べ、紫の主張を否定する方が取るべき行動としては正しい——そう思えと強制する得体のしれない力が、再会を喜びたい気持ちを妨げる。何故か？

煬介が言葉を紡ぐより早く、ぐいとその首根っこが引かれた。

「怪しい奴、ここで何をしている！」

煬介を掴み、怒鳴りつけてきたのは憲兵だった。紫と同じようなことを言っているが迫力は全然違う。おののいた紫と日下部が引いたその瞬間、憲兵は彼らと煬介をはがすようにして、ずるずる煬介を引きずりながら歩き出した。

「ま、待ってください、ちょっと——」

「このあたりで事件があったことを知らんのか。学生は急ぎ各々の校舎へゆけ！」

どうやら、日下部のことも近所の中学生と思っただけらしい。いくら紫の威勢が良くても憲兵を止めることはままならぬ、どうしようもなく呆然とするだけの彼女と日下部を置いて、憲兵は足早に煬介を

路地裏に連れ去る。

「何をじゃれていたんですか、あなたは」

周りに人の姿がなくなると、鉄の声にわずかな呆れを滲ませて、憲兵は打ってかわって静かな声音で言った。

煬介も苦笑いで応じる。

「いやあ、おかげで助かったよ、夜の字」

煬介から手を離し、憲兵は帽子を脱ぐ——現れたのは、夜彦の鉄面皮だ。

「おミキさんで来るものだとばかり思っていたので、探すのに手間取りました」

そのままの姿で来るとは思っていなかったらしい。煬介も朝まで出先で缶詰にされていなければ、変装してくるつもりだった。

「おまえさんも珍しく姿を見せたじゃねえか。……それともこれじやまずいかい？」

「いえ、別に。むしろその姿の方がよいかもしれません」

「一体何処に連れてこうってんだ？」

夜彦は煬介の問いには答えず、すたすたと歩き出した。首を傾げつつ、煬介は彼に続く。

「あ、そうそう」

いきなり振り返った夜彦は、慣れた手つきで煬介の両手に縄をかけた。

「何しやがる」

これくらいすぐ抜け出せるが、一応の抗議をした煬介に、夜彦は事もなげに応じた。

「私は憲兵服ですし、不審者としてしょっぱいている形式で行くのが自然だと思いますので。それらしく、しょんぼりついてきて下さいね」

そのまま表通りに戻った夜彦に、煬介は言われたとおり頂垂れながらついて行く。

塀沿いに進むと、現れたのは藍立の校門だ。すると、夜彦はさも

当然のようにそれをくぐっていく。

（おい、おい）

声に出さないまでも、俯いたままで煬介は狼狽えた。夜彦は堂々と校庭を横切っていく。女生徒たちの視線と、ひそひそ声が聞こえるかのようだ。

やがて、夜彦は校舎の裏で足を止めた。

「このあたりですかね。身を屈めてください」

それは丁度、何かの部屋の裏手であるらしかった。こっそりと煬介は窓の内側を覗く。

「なんだい、ここは」

「職員室ですよ。藍立女学院の」

「それはいいんだが……」

老若問わず、ぴしりとした立ち居振る舞いの職業女性たちが、机の間を忙しなく動き回っている。果たしてこの光景が何を意味するのだろうか。

やがて、教師たちと思しき女たちは次々に職員室から廊下へ出ていく。最後の一人が出て行ったところで煬介は、しゃがんだまま辺りを見張るように目を配る夜彦に目を落とす。

「……で？」

「あなた、まさか気づかなかったんですか」

珍しく驚き瞠った目が、憲兵帽の下から煬介を見た。

「気づくって何に」

「今の先生方の中に、あなたのお姉さんが居たんですよ」

「何だって」

煬介は再び窓に張り付いた。が、人っ子一人いなくなった職員室に、誰かが戻ってくる気配はない。

煬介は、ずるずると足の力が抜けていくにつれ、膝を折った。

何だって？ 今、あのなかに姉ちゃんがいた、だと？

「その様子では……本当に」

「言っな」

ぴしゃりと遮った煬介に従い、夜彦は口をつぐむ。降りた沈黙すらいたたまれなかった。壁に手をつく。

——そう、気づかなかったのだ。
たった五年。

それだけ離れていただけで、俺は何より大切な、姉の顔が分からなかったのだ。

「……なんで連れてきた？」

始末役と人質を会わせるのはご法度のはずだ。かすれた声で尋ねると、夜彦は淡々と応じた。

「今、あなたに裏切られては困るので。……姉君の身柄は、忍天狗が責任を持ってお預かりしております。どうぞ、あなたはお役目に集中を」

これには煬介も理解した。煬介の心が、忍天狗を裏切れという獅子崎の提案に揺らいでいるとみて、忍天狗側が先手を打ったのだ。おまえの大事なものはこちらの手の内にある、そう思い知らせるために。

だが、煬介はそれが分からなかった。姉の顔を覚えていなかった、分からなかった。これには忍天狗、ひいては夜彦も想定外だったのだろう。言い含めるように続ける。

「……あなたが望むなら、面会は不可能ですが、もう一度姉君の顔をお見せすることは出来ます」

「いい」

言い様のない虚しさに、煬介はため息をつく。

「……そこまでされなくなつて、裏切りやしねえさ……俺にや姉ちゃんしかいねえんだ」

「そうですね。……それを聞いて安心しました。では、戻りましょうか」

帰りはあっさりと、目の前にあった塀を越えた。行きにそうしなかったのは多分、降りた先の人の目を警戒したからだろう。

「それでは、私はこれで」

「おい、待てよ。まさかこれだけの用で呼び出したってのか」

「ええ。そうですよ」

あっけらかんと言う夜彦に、煬介は眉間に皺を刻んで噛みついた。
「待て。獅子崎は、連中は何のために忍天狗を裏切ったんだ？」

「それを聞く必要は、あなたにはありません」

有無を言わさぬ強い口調で、夜彦は続ける。

「言っただでしょう。どうぞ、あなたはお役目に集中を」

夜彦は立ち止まり、首だけで振り返ると、一枚の紙を手渡してきた。
地図だ。一目見るに、この周辺のものである。

目が合うと、彼は薄く笑んだ。

「狗堂どのはまだ、東京の地理も十分に把握できていないでしょう。
歩き回ってみてはいかがですか」

それだけ言うと、さっと姿を消してしまう。

煬介は頬を掻くと、また、ため息をついた。

「5 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「5 / 9」

自分に、失望した。

俺は姉貴のために人殺しになったのではなかったのか。それが、姉の顔すら忘れてしまうなんて。獅子崎の言葉が胸に突き刺さる――
――“一番大事なものを失ったとき、それが人間の一番強いとき”。そして時々、どうでもよくなる。全くもって正確に、煬介の心境を言い当てていた。

だが獅子崎と違うのは、彼がそれを完全に失った一方で、煬介の姉はまだ生きている。顔は分からずとも確かに藍立に勤めていて、彼女は息をしている。そのことが再び、煬介を奮い立たせる。

そう、灯里はまだ“居る”のだ。その限り、煬介は戦わねばならない。それが唯一姉を救う術だと、己が生きる道だと信じて。

彼は知らない。

かつて、祖父も同じ決断をし、同じ道を選んだことを。そしてその結果、彼がどういう末路を辿ったのかも――

登校したものの、集会があっただけで授業はなかった。当然だと思ふ。生徒が一人、行方不明になった上殺人の犠牲となって見つかったのだから。

下校は教師が見守る中の、集団下校となった。とはいえほとんどの生徒の親が迎えに来ている。しかし、紫は集団下校組の輪に入って帰った。家の車が来ているのは知っていたが、可能な限り、家にはゆっくり帰りたいからだ。

紫は家が好きではない。十年前、父に引き取られて住むことになった家だ。そこには既に、父の妻と名乗る女が住んでいた。幼い紫

はすぐに悟る、ああ、あたしはここに来てはいけない娘だったのだと。それを知らしめるように、母と呼ぶよう命じられた女からの、しつくと称した厳しい仕打ちが始まった。母を亡くしたばかりの紫にとつて、女は母どころか鬼だった。優しさの欠片もなく、母との思い出を蹂躪し罵倒する女を、そう呼ばずして何と言おう。

だが、つらい日々を送るうち、紫は徐々に知っていく。本当は幸せだったあの日々こそ、偽りだったことを。紫の実母こそ父の妾で、自分はその子だったのだということを。

そのことを知ると、義母の自分への冷たい態度、罵りにも似た怒声、叱咤と共に打ち据えられる平手に、理解が生まれた。これらは義母の悲鳴なのだ、己に向くことのなかった愛とそれが生んだものを、義母は激しく憎んでいるのだ、と。夫を詰ることが出来ないのは、女の悲哀であろう。ないまぜになったすべてを、彼女は紫にぶつけている。そして父はそれを知っているからこそ、紫の境遇を見て見ぬふりをしている。

最初は理不尽に震え、嘆いていた紫も、成長するにつれ分かり始めた。可能なら義母の顔を見ず、怯えたふりをして離れ、彼女の前に姿を見せないのが一番良いのだと。父にすぎるのではなく両親と距離を置くことが自分の身を守ることになるのだ。父はそれに気づかない。ただの思春期だと思って、扱いにくい娘だと思って紫を見ている。それでいいと紫は思う。早く、家を出ていけばいい。

だが、義母は紫が高等女学校に進学する際、寮に入ることを許さなかった。家から近場の女学校を探させて、そこに通わせている。紫はそれだけは理解できなかった。そして間もなく、紫の婚約が勝手に決められたことも。寝耳に水であった。

最初は父も渋っていたらしいが、相手方が明示した条件により首を縦に振ったらしい。つまり金に目がくらんだのだ。船成金の父だが、最近の不景気で会社は傾き始めている。

相手が自分を見初めた理由も何もかも分からないが、義母から、この家から離れられ、父の助けにもなるのは間違いない。本当なら

受けるべき縁談だ。頭では紫も分かっている。だが、たった一つそれを妨げるものがある。それこそ、紫がこの十年を耐えきることが出来た理由でもあった。

つまり、幼馴染の存在である。

五年ほど前に音信不通になるまで、紫は彼と文通を続けていた。何度となく伏雁村へ行こうと思ったか分からぬ、連れ戻されるのが目に見えているので実行したことはないが……幼馴染の安否、ただそれだけが知りたかった。不安に押しつぶされそうなの五年、それでも紫を支えたものは、やはり彼の手紙の最後に、必ず書かれていた言葉——“いつか、必ず会いに行く”。ただ、その約束だけだったのだ。

その彼と同姓同名の少年が、紫の目前に現れた。心臓が止まりそうなほど嬉しかったのだ。だが、彼は幼馴染ではないと否定する——そんなことはない！紫は何の根拠もなく、そう断言できた。多分、何らかの事情があつて、彼は素性を明らかにすることが出来ないのだ。

「あ……」

車道を挟んだ向こうの歩道に、下校中の紫は彼の姿を発見する。煬介は彼女に気づかない。立ち止まりそうになる紫を級友が通り過ぎ、最後尾の教師がせつづく。

気づいた。彼は髪に隠れていない片目を軽く見開くと、目を逸らし、さつと行き過ぎてしまった。

振ろうと掲げていた手を、紫は止める。教師に名を呼ばれて、諦めて列に戻った。

何故だろう。無性に彼と話がしたい。あれだけ頑なに幼馴染であることを否定した、ますます怪しい。これはただの勘だ。それでも紫は自分の勘がよく当たることを知っている——

気づけば、紫は自宅の前に辿りついていて。集団下校の列の姿はもはやない。

きよろきよろと見渡しながら、そつと西洋式の門をくぐり、庭園

を横切る。そこへ、声がかかった。

「紫さん？」

庭園にいたのは、和服姿の義母であった。

「あ……お義母様。ただいま帰り——」

「あなた、お車は？」

義母の眦が吊り上がる。紫はしまったと臍を噛んだ。あれは父でなく義母が出した遣いだっただ。

「ええと……気づきませんでした」

「まさか、日野家の令嬢であろうあなたが、この一大事に歩いて帰ってきたなんて！……ああ、娘の大事にお車を出すことも出来ないのかと、あなたのお父様が世間様にどのように見られることがあなたには理解できて？」

「申し訳ありません、お義母様」

出来る限りうなだれながら、紫は殊勝を貫く。年を取り多少丸くなったのか、紫の体格が義母に近づいてきたせいか、彼女が暴力に訴えることは少なくなっていた。刺激しないように小言を聞き流していれば、自然と向こうから流れを切ってくれる。

「……、もういいわ。部屋へお入りなさい。学校はどうせしばらくお休みでしょう、家にいなさいな。因幡さんからお誘いが来たら、今度こそ断らないのよ、よろしいわね」

「はい、お義母様」

誰が行くもんかと胸中で舌を出しつつ、紫は長い髪を翻した。これでようやく部屋にこもれる。

「そうそう、紫さん」

「っ、はい」

振り返ると、義母の目が弓なりにしなつた。

「本当に怖い事件ね……気をつけなさいね」

能面のような表情。

「……はい」

時々、義母が何を考えているのか読み取れないことがある。

このときも同じ、薄気味悪いものを感じながら、紫は早足で家中に入った。

その翌日。

いつもの通りろくに会話もない、義母と二人きりの朝食を終え、紫は二階の自室から庭を見下ろした。

やっぱり、息が詰まる。

どうしようか。紫は掌にのせた、かんざしに目を落とした。桜をあしらった、漆の剥げた簡素な木製の物である。紫の物ではない。これは、昨日会った少年——幼馴染に似た、あの少年が落としていったものである。

当然かんざしなのだから女がするものである。どうして彼がこんなものを持っているのかは知らないが、大事なものなら返さねばならない。

そしてそれ以上に、紫は彼に会いたかった。かんざしは丁度いい口実である。もう一度ゆっくりと顔を合わせて話をしたい。その氣持が急くように湧き続ける。

どうにかして家から抜け出せないか、紫は悩んでいた。玄関から堂々と出ていくことはさすがに出来ない。かといって二階から出ようにも……

「そうだわ!」

ぽんと手を打って、紫は自分の机を探る。出来る限りそれらしく見えるような、手紙を。ここにあるのは、婚約者から送られたものだ。そのうちの一通を持って、紫は階下に降りる。

義母が庭に出ているのは、先に二階から確認済みだ。傍にいた使用人に声をかける。

「ねえ、円タクを呼んでちょうだい!」

「えっ? でもお嬢様、今日は何処にもお出かけにならないのでは……」

そこで、紫は机から持ち出してきた婚約者からの手紙を掲げる。

「この手紙にね、こっそり書いてあったの。今日は内証で映画を観キネマに行きましょうって、ホラ！」

見せた券は、いつぞやすっぱかした古いものだ。が、使用人がわざわざそこまで確認することはない。彼女はおろおろと庭の方を見やった。

「でも、奥様が……」

「お義母様には言っちゃだめよ、活動写真なんて低俗なもの、観るなって怒られてしまうわ。お願い！」

「……わ、分かりました」

使用人がぱたぱたと玄関に走っていくのを見て、紫はほくそ笑んだ。

「はあ……」

でかい洋風の屋敷に足を運んでいた煬介は、先導する夜彦について歩きながら、そのあまりの広さと装飾具合に目をぱちぱちさせていた。

おのぼりさん丸出しの様に、使用人たちがひそひそと声を交わす。やがて、二人は廊下のつきあたり、扉の向こうに案内された。

そこにあつたのは、庭が見える広々とした客間だった。小さな卓テーブルを囲むような西洋風の椅子に腰かけていた男性が、立ち上がって深々と礼をする。

「ようこそ、お越しくださいました」

「日野さん、御無沙汰しております」

憲兵服の夜彦が帽を脱ぐ。その格式ばったやり取りに、煬介はただ目を白黒させるばかりである。

突然下宿に現れた夜彦に、連れて行かれた先がここであつた。

下宿と、目と鼻の先にある高級住宅街の一角である。何の説明もない夜彦をなじるようにじっと見つめると、相変わらず涼しげな横

顔はこうのたまった。

「こちら、今回の依頼をお受け致します、忍天狗でございます」

「は……？」

「ああ、どうもよろしく」

にこやかに握手の手を差し出すこの男、どうやら忍天狗のことを知っている者らしい。

ある程度の資産家や華族、政治屋なんかになると、忍天狗の名を耳にしたことがある、という者は増える。もつとも裏の噂の範疇を出ず、この男のように、忍天狗に依頼して事を運ぶということを出来る者まではそういない。おそらくは忍天狗そのものに資金援助しているとか、そういう直接的なつながりがあるのだろうが、煬介にはあまり興味が湧かなかった。

それより、男の顔を見上げて、お互いの動きが止まる。

「あつ」

「君は……」

慌てて手を引っ込めた男の顔は、見たことがあるものだった。

「お知り合いで？」

目ざとく、夜彦が口をはさむ。

答えあぐねるうちに、男の方が応答する。

「いや、彼の顔に少し見覚えが……あつてね」

夜彦が何か言うより早く、煬介は言葉を拾った。

「それは先代、狗堂幹久でしょう。……私は狗堂煬介と申します」

「やはりそうか」

男の顔が歪む。再会の喜びではなく、単なる驚愕であった。

「改めて名乗りましょうか。私は日野義経、日野造船という会社の取締役というのをやっております」

それ以上は他人の振りをして、男——日野は咳払いした。

煬介の古い記憶が正しくば、この男は、紫の父のはずだ。

とすれば、ここは紫の家なのである。煬介と夜彦は椅子を勧められて、日野と向かい合せに座す。彼女にこんなところを見られたら

……と思うのもつかの間、日野はこんなことを口に出してきた。

「実は、娘が行方不明になりましたな。それを見つけ出して、連れ戻していただきたいのです」

煬介は表情を面に出さぬよう努める。日野が弾いたのは一枚の写真であつた。女学校の集合写真である。

「お嬢さん、お名前は？」

「紫、と申します。いやはや、お恥ずかしいことに少し、おきょうな娘でして……藍立で、酷い事件が起きましたでしょう。娘はそこに通っているのですが、今日はそれが休みでして。家にじっとしていると言つたのにも関わらず、いつの間にか抜け出してしまつていたようで……」

「誘拐の可能性は」

「使用人の話によりますと、円タクを使つて駅まで行つたという足取りまで掴めております。娘には婚約者がいまして、彼に会いに行くと偽つたらしい。婚約者の方にも、探してもらつております」

煬介は夜彦と顔を見合わせた。

「……気まぐれお嬢さんの家出つてところかい」

「そんな軽い話ではありませんよ。これは、あなたの“役目”にも関係しているんですから」

窘めるような夜彦の言に、煬介はきよとした。

夜彦は日野に視線を移す。

「日野造船さんは、最近、労働者を大規模解雇しましたね？」

「え、ええ……」

話の方向性を変えた夜彦に、日野は戸惑いを見せる。夜彦は意に介さず続けた。

「その中に、うちになじみ深い者がいましてね。……いやなに、貴方を責めるつもりはございません。しかし、お嬢さんが誘拐される危険性をはらんでいるとするなら、そのことです」

「では、忍天狗が紫を浚うかもしれないと」

「元、です。日野さん、前々から申していました通り——連中の

思惑通り事は運んでいるかもしれません」

「おい、待て。話が見えないぞ」

煬介は乱暴に間に入った。青白く顔色を変える日野と、鉄面皮の夜彦を交互に見舞って。

「“連中”ってなんだ。もしかして——」

「ええ、あなたの予想している“連中”です」

獅子崎たち一派のことだ。

夜彦の一言で、煬介の知る事実が繋がり始める。そうか、殺された女学生、監視役とは、紫の身を守るための監視役だったのだ。

おそらく忍天狗は、獅子崎の裏切りが日野造船の解雇騒動に絡んでいるものと知っていた。日野社長に恨みを持った獅子崎かその一派の誰かが、彼の娘に危害を加えることを予期して、日野に口添えしていたのだろう。獅子崎たちは手始めに、邪魔となる監視役を殺す。紫が自力で行方不明になったのは日野としては頭が痛いことだろうが、獅子崎たちにとっては好機以外の何物でもない。

「ふうん……それで俺が呼ばれたってことか」

「さ、猿國さん。紫は……」

狼狽する日野に、夜彦は和やかに応じる。

「ご心配なく。万が一奴らの手に落ちていたとして、お嬢さんにすぐさま危害が加わる、ということはないでしょう。……狗堂どの」
「分かってるさ」

ティーカップで出された茶を啜りながら、煬介は鷹揚に応じた。

元々、こちらの仕事は連中の殲滅である。

「お嬢さんの命は保障しましょう、ご安心ください」

「ほ、本当ですか。お願いします」

深々と頭を下げる日野を、煬介は冷ややかな目で見つめた。

——保証できるのは命だけ、なのだが。

「6 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「6 / 9」

日野邸を辞した後、足早に煬介は下宿に戻り、ミキに変装して、裏通りを歩いていていた。すなわち人の目の届かぬところ、密会には打ってつけのところである。

「いるんだろう、獅子崎のオジキよ」

以前、ならず者たちを返り討ちにしたあたりで、煬介はしゃがれた声で呼びかける。

「……おまえから、わしに呼びかけてくるとはな」

意外そうな口調で、獅子崎の声は何処からともなく応じた。

「それで、わしらにつく心づもりはついたのか」

「まだそんなことを——」

「おめえ、姉貴に会っただろう」

煬介は言葉に詰まる。夜彦と藍立に行ったとき、忍びの気配などかけらも感じなかった。一体、この男はどこまで把握しているのだろう。

「変な気を起こすなと言ったろう。わしの方が、おまえたちよりも忍びとしても始末役としても上手なのは当然じゃ」

「……会ったつつつても、顔を見たわけじゃねえ」

苦し紛れに言つと、獅子崎は高らかに嗤った。

「下手な言い訳はよせ！ 正直に言いな、顔も分からなかったのだろっ！」

「黙れ！ あんたこそ、日野造船の娘を浚ってどうするつもりだ！？」

「ほう」

獅子崎は一拍間をあけると、続けた。

「そこまで嗅ぎ付けたか……いや、元々忍天狗と繋がりの濃い会社

だ。おまえが知っていてもおかしくはないな」

「数か月前、日野造船で大規模な解雇騒動があったそうじゃねえか。この不景気だ、元々貧窮している労働者なら、職を失えば借金を返す当てもなく、文字通りクビを切られるようなもんだろ。そういったの中にあんたの関係者がいた。そうじゃないのか？」

煬介が一息に言い切ると、不気味な沈黙がしんと続いた。

夕暮れに落ちる、押し殺したような笑い声。

「残念ながら、不正解だ」

煬介は相手に聞こえぬよう、小さく舌打ちした。しかし獅子崎はあざ笑うような響きで言葉を続けようとする——それを、煬介はさらに遮った。

「俺の推測が外れてたって所詮それきりだ。もう一度聞くぞ、日野造船の娘を浚ってどうするつもりだ？ あんたら、自分の立場がよっぽど分かかってねえらしいな」

「それはこちらの科白だ、煬介よ」

突然、冷たい空気があたりを満たしたような気がした。迫る夜風のせいではない、獅子崎が態度を変えたのだ。

「おめえはこっちに協力しねえってんなら、邪魔はしないでもらおう。どのみち、おまえにわたらの居所は分かるまい」

監視役一人殺したくれえで、天狗に戻った気になってんじゃねえ。

——煬介は怒りに任せて、口に出しそうになった言葉をこらえた。ここで挑発に乗っても、挑発をかけても意味はない。むしろこちらの方が分は悪いのだ。姿が見えないだけ、敵とみなされれば先手はあちらになる。

危険だ。

「……ああ、そうかい」

煬介は賭けに出ることにした。

両手をだらりと下げていた姿勢から、腕組みへ。両足をついていた姿勢から、壁にもたれかかる。つまり、不慮の攻撃の反撃に移るには、やや不利な体勢に、自ら。

「オジキよ、俺はあんたの言ったことが少しは理解できたんだぜ」

「……何？」

「“むなしい”ってやつさ。あんたの言うとおり、姉貴の顔が俺には分からなかった。そのとき感じた自分に対する失望や虚しさのせいか、今の俺は何がどう運んだってどうだっていいって気持ちになっちまってる——忍天狗が勝っても、あんたらが勝っても」

「そうか。いや、そうだろうな」

獅子崎の声は固さを帯びていた。彼は反芻している、煬介にかけた言葉を、かつて己の身に起きた“むなしさ”を。

それに、煬介はつけこんだ。

「あんたに言われなくとも、今回、俺は傍観に徹しようと思ってね」「ほう？」

意外そうな声。煬介は続けた。

「俺の任務は、あんたらの始末。あんたらと忍天狗の間に落っこちた、日野造船についての事情は知ったこちゃないんでね。下手に手を出してあんたらが殺れねえなら、本末転倒だ」

本当は、忍天狗から紫嬢を探せと命令を受けている。しかしそれは足りない監視役としての役目で、煬介はあくまで始末役目を優先させねばならない。

「正直に言うねえ、始末、とは」

「あんたも分かってるだろう？俺にや俺の立場がある。まずはそれを守らねばならん、俺が真に誰の味方についていたとしても」

拳動不審を見せれば、煬介の動向を警戒している忍天狗は、灯里を使うのに躊躇わない。かといって全面的に忍天狗の味方をするのに疲れてしまった煬介は、獅子崎側とも交渉の余地を残したいのだ。これは取引だ。

煬介は最後の切り札を切る。

「俺はこれから、忍天狗の捜査の目を攪乱させる。あんたらのためにな」

獅子崎は答えない。ひゅうひゅうと風が吹く、その中に煬介は呼

びかける。

「その働きで、あんたは俺の価値を判断したらいい」

「……一つ、訊かせろ」

ここでようやく、獅子崎は応じた。声は低い。まだ、訝しんでいる。続いた言葉もそうだった。

「それをして、おまえは何の見返りを得る？」

獅子崎たちの味方をして、煬介は何を得るか、だ。

問われることを想定していた煬介は、当然そのとおり答える。

「あんたが保証しただろうことだ。俺の自由——今のあんたの立場が欲しい」

忍天狗からの解放。

つまり、裏切りだ。

獅子崎は嗤う。そのうちに、その声はどんどん大きくなっていった。

「いいだろう、煬介！　ただし……おまえの動きは監視させてもらうぞ、いいな」

「好きにしろよ」

今までもさんざん見張っていたくせに、とは言わない。ここで獅子崎の心証を害してはいけない。信用を崩すのはいけない。

煬介——ミキはその場に背を向け、よたよたと歩き出した。監視をつけるという宣言にも関わらず、追ってくる気配はない。路地を抜け、大通りに出たとき、煬介は人知れず笑んだ。

——勝った！

煬介が寝返りを示唆してみせたのにはわけがある。一つには、獅子崎側がまだ、紫の身柄を押さえていないという、確信ができたからだ。

監視役殺害からの流れ、獅子崎の今回（とは限らないが）の真の目的は紫であった。煬介の寝返り交渉は、その次点にすぎない。

忍天狗は人手不足で煬介を東京に送る際、獅子崎と師匠弟子の関係であった煬介が寝返らぬよう、おそらく早い段階から監視役をつ

けていた。獅子崎もそれは予想していただろうが、煬介が、標的である紫と接触を持ってしまったために慌てて、交渉に来た。今も隠し続ける“日野造船への恨み”が、煬介に明らかにされ、寝返り交渉の余地をなくされるのを恐れたのだろう。

そして殺害された監視役。彼女は紫のそれも兼ねていたために、元々獅子崎から狙われる立場であった。獅子崎が、彼女が煬介の監視役になったことを知った経緯までは分らないが、余計な情報が漏れることを危惧して、煬介と接触を持った直後に監視役を殺害する。

ここからが、本格的な紫誘拐計画の開始だったはずだ。紫に、新たな監視役がつき忍天狗側の体制が整うより早く、彼女を浚う。だが、その手順にも狂いが生じる。紫が、自力で行方不明になってしまったことだ。

今日のどの段階で獅子崎が彼女の行方不明を知ったかは分からないが、煬介の訪問に応じた時点で、彼女を見つけれられていないのは容易に推測できる。何故なら紫誘拐こそ真の目的である獅子崎が、彼女を手中にした時点で煬介の求めに応じることはないからだ。計画を次の段階に移すことを優先するはずである。つまり、獅子崎の手元にある駒は、忍天狗の想定よりも少ない。

そして今現在の状況で、獅子崎が煬介に何を期待しているか——これこそ最も重要な点だ。煬介は寝返る態度を見せた。それ以上に、求めるものは一つしかない。

すなわち、紫の身柄を確保し、獅子崎の下に連れてくることである。

そのためには、忍天狗、獅子崎たちの両方よりも早く、煬介が紫を見つけないければならない。もっとも忍天狗側からは情報が入ってくるので、彼らが先に見つけてもいいのだが……もしかしたらこちらにも、あまり手が回っていないのかもしれない。もとより、女学生に重要な監視役を担わせ、その結果殺害されてしまうような人手不足だ。

さて、どうしようか。

実際のところ、土地勘のない煬介が訪ねられるところなどたかが知れている。紫と同じ藍立に通う少女がいる、あの麻雀屋である。

客にあの三人が来ていれば、搜索に手を貸してもらえるかもしれない。ほんのわずかな希望だけを胸に、ミキはそこに足を向けた。

「7 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「7 / 9」

まさか、ここにいるとは。

ミキは痛む頭を抱えつつ、紫煙曇る店の中、眼前の雀卓を囲む、四人の男女を睨みつける。

すなわちあの三人組——日下部、新藤、相川と、真剣な顔で牌を見つめる日野紫の姿であった。

「あらあら、おミキさん。今日はえらく遅い時間においでだね」

出前から帰った店の女将が声をかけてくる。ミキたちがいるのは一階食堂の入り口だ。どうも、二階の雀荘が客で埋まってしまったから、この四人はわざわざ卓を運んできて麻雀を打っているらしい。「これ、お嬢さん。どうしてこんなところにいるんだい？」

後ろから杖でつついて尋ねると、紫は振り返りもせず答える。

「家を出て、どこへ行くかと迷っているときに、ばったり学校のお友達——この娘さんなんですけど——に会っちゃって。誘われて、遊びに来ているんです」

「そのわりに、その娘さんの姿はないね」

「彼女、夜は家のお手伝いで忙しくて。私も帰るに帰れなくなっちゃったから、こうやって遊んでもらってるんです……はい、ロン」

「無茶苦茶つえーんだよ、彼女！」

相川が頭を抱えて叫ぶ。新藤も真つ青な顔で頷いた。

「こないだから、随分ついてないよね僕ら。狗堂君と紫さんなら、どちらが強いだろう」

「そんなに強いのか、彼」

狗堂という名に、ぱっと顔を上げて紫が反応する。

「そりゃ、もう。きみと同じでね、初めて麻雀するって言ってたけど、ありゃ嘘だよ」

日下部の言葉に、紫は笑みを浮かべた。
その様子に、ミキは気づかれぬようこっそりと溜息をつく。
やれやれ。

「しかしお嬢さん、お屋敷では親御さんが心配しておられるよ。早くお帰んなさい」

ミキの言葉に、紫は渋い顔で振り返った。

「嫌ですよ。私、折角家出てきたのに。それに、ここにいれば彼に会えるかもしれないじゃない」

「彼？」

「狗堂さんよ。私、彼と会って話したいんです」

「話って、何の」

「いろいろと……積もる話。内証です」

ミキと紫の会話に、興味津々といった様子で聞き耳を立てる三人組に気づき、紫はぶっきらぼうに言った。

「どうしようもない。そういえば、紫は昔から頑固だったなあとしみじみ思う。今現在、ぶっちぎりの厄介以外何物でもないが。」

「そんなこと言っただって、お嬢さんはお家の人に探されてるんだよ」

「あら、そう」

「見つかりや、お店に迷惑にけるだろう。それでもいいのかい？」

黙り込む紫。すると、店の奥から店主が出てきた。太い笑顔だ。

「まあまあ、これくらいの子頃の娘さんなら、親と衝突することもあるうさ。うちは別にかまわんよ」

「しかしね」

「さあさ、おミキさんも呑みなって！　なに、今日はうちのおごりにしとくさ。なっ」

店奥には、はらはらしている店の娘の姿がある。どうも、親爺は紫を連れてきた娘を庇う気にいるらしい。

まあ、紫から目を離さなければいい話だ。

店主にぴよいと摘まれ、席に座らされたミキは、横目で麻雀にイそしむ彼らを眺めつつ、ただ酒にありつくことにした。

それから予想の通り、時計の短針が夜半を指す頃になって、紫が卓に突つ伏した。

「なんでえ、お嬢さん。もう御仕舞かい」

向かいに座す相川が紫に酔った手を伸ばす——それを、素早く立ち上がったミキが、ぴしゃりと打った。

「いつてえ！」

「てめえで吞ませといて、そりやないんでないかい、酔っ払い。大人しくしときな」

ちえ、と相川は渋々引き下がっていく。その酒臭い息に眉をひそめると、ミキは紫の身体を揺さぶった。

「お嬢さん。ちよいと、しっかりしな」

どうも本当に、酒を吞んでいるらしい。ぐでんぐでんに酔っている。

まあ、都合はいいか。

これから起きることを予期してそう考えるが、紫は不意に伏せていた顔をこちらに向けた。

「うーん……」

酒気に赤らんだ頬、瞼がぱちぱちと開いたり閉まったりするたび、長い睫が瞳にかかる。

不覚にも、煬介は胸が鳴った。性格に難はあるものの、紫は世に言う美少女なのである。

いかん、と煬介——いやミキはかぶりを振った。無理矢理水を飲ませると、紫はややしゃんとした。ミキ自身も多少吞んでいるが、元々ザルな性質なので支障はない。

「全く、お嬢さんたら仕方がないねえ。……ご主人、お勘定」

「ああ、いいよ。うちの娘も世話になったからねえ」

他の客の注文を取っていた主人が、忙しげに応じる。

「お嬢さん、大丈夫かい」

「平気、平気。表に出たところでタクシーを呼ぶさね」

紫を無理やり立たせ、店を出る。三人組の誰かが追ってくると思われたが、それもなかった。彼らもそうとう酔っていたのだろう。

眠たげな紫の手を引いて、賑やかな繁華街をミキは歩く。

「ねえ、おミキさん」

「何だい」

「彼、どうして来なかったのかしら」

煬介の事だ。

「……そりゃ、そうそう毎日麻雀打ちに来るもんじゃないだろうさ」

「でも、私わざわざ彼に会いに来たのに」

「会ってどうするんだい？ 確か、あんたの幼馴染にそっくりなんだっけね」

「そっくりと言うか……ええ、そうね、彼のような気がするの。私の幼馴染。彼は否定していたけど」

そこで紫は、着物の袖の中からかんざしを取り出した。ミキはそれを見て驚く。変装道具だ。どこかで落としたと思っていたが、紫が持っていたのか……

「これ、彼が落とした物なのね。どういった物かは知らないけど……返してあげたくって」

「それだけのために、家出したってのかい」

ミキは呆れた。

徐々に人通りのない道を進みながら、二人は会話を続ける。酔いのせい、紫はそれに気づかない。鉄道が真下をくぐる陸橋が、歩みの先に見えてきた。

「だって、大事なものかもしれないでしょう」

「じゃああの店に預けていけば良かったのに」

「そうね、そうすれば、良かったかな……」

そのまま、紫はミキに寄り掛かるようにして、力を失う。

まるで崩れるように眠りについた少女を見下ろして、ミキ――
カルモチン――
煬介はようやく効いたか、と溜息をついた。飲ませた水に催眠薬を

入れておいたのだ。

彼女の身体を抱き上げ、橋のたもとに横たわらせる。すると、闇深い橋の向こうから、足音が聞こえてきた。

地味な色地の着物姿の女が一人。

今この時分この辺りをうろつくにしては、心もとない若い女だ。

「日野紫さんをお迎えに上がりました」

元々のものか、妙に耳をつく高い声で女は宣言した。おそらく、女の夜目はミキと紫の姿を捉えているのだろう。彼女が視線を向けた方角は間違っていない。

ミキは紫をそのままにすぐと立ち上がると、女の方に立ち寄る。すなわち、橋の上へ。

「獅子崎の使いの者か」

「はい」

「獅子崎は何処にいる？」

この橋は赤坂御用地の端にある。橋下の線路は、古くは江戸城の外濠を削ったもので、池の傍に位置していた。橋の周りも街灯と草木が生えているだけで、民家の灯りは遙か遠い。

すなわち、人が身を隠せるようなところは殆どないのだ。

女は答えない。つまり、獅子崎はここにはいないということだ。

「よくぞまあ、先回りをしたものだ」

この女がミキたちを監視していたわけではない。もとより、獅子崎は煬介に監視などつけてはいなかった——その代わり、彼が通りそうな道に、手下を配置しておいたのだろう。

「紫さんをお渡してください」

「その前に一つばかり訊きたいことがあるんだが、いいかね？」

女と一定の距離をとって立ち止まると、ミキは続きを口にした。

「おまえさんは、わしを殺せと命令されてはおらんのかね」

苦笑交じりに、女は答えた。

「ええ。あなたは、我々の同志となるのだと」

「……そうかい」

ミキは自分の背後、橋のたもとの闇を指さした。

「お嬢さんはあそこだよ」

「ありがとうございます」

女は真つ直ぐ歩いて来ると、ミキを通り過ぎた――

それを、ミキの杖が阻む。

ただ阻んだわけではない。仕込み杖――刀は鞘を振り払うように抜かれていた。かつと目を見開いて跳び退く女。ミキが振り上げた刀は、女の右逆手が握る苦無で防がれる――が、男の膂力が上回った。女の白い腕を刀が蹂躪する。

血液が迸る。女はさらに退こうとするが、間に合わない。腕に刺さったままの刀を、ミキは真つ直ぐについた。女は必死に首を反らせて回避する。その左手が何かを抜いた。

ミキはそれを読んでいた。空いている右手で彼女の左手首を掴むと、膝で肘をへし折り武器を手放させる。苦無だった。こいつ、他に武器がねえのか――鉄砲とか。

そう思った矢先、女は膝を折ると、ミキの刀を腕に差したまま前転し、ミキから距離をとった。素早く立ち上がる。

逃げるつもりか。

向けられた背に、ミキは軽蔑の舌打ちをした。女は脇目も振らない。ミキは足元の苦無を拾うと、着物の裾目がけてそれを撃った。足首をかすり、着物の動きを妨げたそれは、女を転ばせる。

「逃がすと思うか？」

近づいていくと、女の身体が痙攣しているのが見えた。あ、とミキは顔を歪ませる。

「コイツ――」

伏せていた女の顔を仰向けにすると、土気色したそれは死相を浮かべていた。唇からはだらしなく流れた涎。毒だ。

「チツ」

悲鳴を上げて誰も来ぬような場所だ。逃げ切れぬと悟って、拷問される前にと自決を選んだのだらう。しかしこんなところで死な

れては、死体の処理に困る。

さて、どうするか――

ミキはここが陸橋の上なのを思い出して、指を弾いた。

「8 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「8 / 9」

「ん……」

紫は体がふわふわと浮いていることに気づいて、目を覚ました。目の前にあったのは、見覚えのない背中と、尾っぽのような黒い束ね髪。負ぶられているのだ。驚いてあつと声を上げると、紫を背負っている彼は後ろを振り返った。

「ああ、気が付いたか」

「あ、あなた……」

それは狗堂煬介だった。ひどく仏頂面をしている。

「どうしてあなたがいるの!？」

「ん、いや……あの婆さんとは顔見知りだね。あんたがはた迷惑なことに寝ちまったところを、俺が通りかかったのさ。婆さん一人じや運べねえからつつてね」

本当は返り血を浴びた着物では到底紫を運べそうになかったから変装を解いたのだが、紫はそんなことを知る由もない。

「おミキさんは？」

「婆さんの家に送ってつたよ。今は、あんたんちまでの帰りだ」

きらきらと光る視界は、大きな通りの歩道であるようだった。薄暗いとはいえ、まだ車も人も行き交っている賑やかさである。途端に、紫は今の自分が恥ずかしくなってきた。なんせ、身内でも何でもない男性に負ぶわれているのである。

「ご、ごめんなさい、降ります、私」

「おう。そうしてくれると有難いね」

皮肉っぽく応じると、あっさり煬介は紫を降ろした。彼には荷物もあつたらしく、大事そうに抱え直したそれに紫は余計申し訳なくなる。

「あの、私……寝ている間に、何かご迷惑を……」

「別に。涎垂らして、気持ち良さそーに寝てただけさ」

「う……」

煬介は機嫌が悪そうだ。そりゃ、道を歩いていたら突然娘を負ぶって送れと言われたら、誰だってそうなるに違いない。

そっぽを向いていた煬介は頭の後ろを掻くと、くると背を向けた。

「早く行こうぜ」

「は、はい」

早足な彼の後ろをついていきながら、そうだ、と紫はかんざしの事を思い出した。

「こ、これ！」

「ん？」

紫が後ろから差し出したそれに、彼は声だけで気づいたらしい。後ろに目玉でもついているのかと思う調子だった。

「ああ……コレ」

「大事なものの、だったらと思って。女物、でしょ、それ」

煬介は検分するようにそれをじろじろと眺めると、道端のゴミバケツにそれを放り込んだ。

「ええーっ!？」

「何だよ、俺がためえのモンどう扱おうと、俺の勝手だろ」

「そ、それはそうだけど……」

人が返した物をその眼前で捨てるなんて。

衝撃を受けた紫が目を真ん丸にしていたせいか、煬介は顔をしかめると、少し間をあけてこんなことを言ってきた。

「俺の実家の近くに、花街があつてね」

「は……はあ」

「そこの奴で、俺を追い回すのが趣味の嫌な女が居てね。そいつが俺の着物の裾に勝手に忍ばせていたらしい。だから、捨てられてせいせいした」

妙に説明口調で煬介は話を締めくくった。

「それはそれで……持つてきちゃって、ごめんなさい」

「いや、あんたがそんなこと知りようもねえしな」

そしてまた歩き出してしまふ。

狭い歩道だ。隣に並んで歩くこともままならない。仕方なく列を作るようにして、煬介のうしろに並んでついていく。

「ねえ。あなたの故郷って、何処だったかしら」

煬介は答えない。

「私はねえ、伏雁村っていう田舎だったのよ。どこの府県だったかは覚えていないけれど……ね、あなたの田舎はどんなところだった？　どんな人が近所にいたの？　遊びとか歌とか、ねえねえ」

懲りずに話しかけていると、やがて煬介がため息をついた気配がした。

「……そんなに大事な幼馴染だったのかい」

背を向けたまま、低い掠れた声で煬介が問ってくる。

紫はきょとんとした。彼が、自分から幼馴染の話題を振ってくるとは思わなかったからである。紫は慌てて「ええ」と答えると、続けた。

「もう十年も会っていない、手紙のやり取りも五年前から途切れてしまったわ。けれど、私は彼を忘れたことなんてなかった。いつかきつと会えると……そう夢見て、今日まで生きてきたんだもの」

煬介は振り返ると、紫がひどく稀有なものであるかのように、まじまじと見た。この驚きを、紫は理解していた。誰だって普通は、十年も会わない幼馴染を、そこまで大仰なものだと捉えないだろう。「……あんたの幼馴染は、あんたが思うほど素敵に育つてるとは限らないよ」

煬介は迷った末にか、そんな言葉を返してきた。紫は曖昧に笑う。「いいの。私が、勝手に会いたいつて思ってるだけだから」

煬介は目を逸らした。

「とにかく、俺はあんたの幼馴染じゃない」

ぶつきらばうに呟くと、ぷいと正面を向いてしまった彼に、紫は

唇を尖らせた。

「紫お嬢さん！」

そこへ、車にクラクションを鳴らされながら、走ってくる影があった。紫はあつと声を上げると、煬介の背に隠れた。

「おい、おい」

男は近づくと、煬介の真正面で立ち止まった。長身のでっぺんについた整った顔が、紫を見下ろしている。軍制服を着ているので、彼は学校帰りに紫を探していたのだろうか。

「お嬢さん、ああ、良かった、無事で！……きみは？」

突き刺さる不審の目に、煬介は飄々と答えた。

「俺は依頼を受けて、彼女を保護した者だ」

「依頼？」

「では、きみが狗堂君か……話は日野さんから聞いている。ありがとう、あとは私が彼女を引き取ろう」

「それはいいが、あんたは誰なんだ？」

率直に尋ねた煬介に、男は苦笑いした。

「これは失礼した。……私は因幡天翔。いなばてんしょう彼女の……紫さんの許嫁だ」

いつものように朗らかに微笑みながら、天翔は煬介に握手の手を差し出した。天翔がのつぽなせいで大人と子供くらい身長差がある二人に、紫は尋ねた。

「ねえ、“依頼”って何ですか？」

「あなたが行方不明になったから、心配したお父様があなたを見つけてくれと、この方に依頼されたんですよ」

驚く紫。煬介はどう見ても、紫と同年か少し上くらいの少年だからだ。

その表情に気づいたのか、天翔は付け足す。

「探偵さんです」

「探偵！」

「……俺はもういいな」

いつの間にか紫を引きはがしていた煬介は、諸手を挙げて後ずさ

った。紫が何か言うより早く、天翔が頭を下げる。

「ありがとうございます」

「では、これで」

「あ、あの！」

去っていく煬介は振り返らなかった。その背に、紫は言葉を投げる。

「また、会いましょうね！」

返事はない。

さあ帰りましょう、と天翔が肩に手をかけてくる。諦めかけたその時、煬介の片手が上がった。

紫は嬉しかった。

彼が幼馴染でなかったとしても、これきりでないと、彼が約束してくれた気がした。

「お疲れ様でした」

「ん」

煬介が薄暗い裏路地に入ると、憲兵服の男が声をかけてきた。それと同時に、煬介は手に持っていた包みを彼に押し付けた。

「何です？」

「開けてみる」

言われるがまま、風呂敷を広げた夜彦は、中身を確認して――
反射的に目を閉じた。細かく頷く。

「……なるほど。お疲れ様です」

煬介は意地悪く笑う。

「一人目だ」

――包みにあったのは、女の生首だ。

当然、獅子崎の手先のものである。身体の方は、陸橋から線路に突き落としてきた。朝になれば都電が轢いてくれるだろう。あとは、通りがかりの無関係の場所に隠してきた変装道具を回収するだけで

ある。

「そいつは忍天狗だろう？」

「ええ、標的の一人です」

「ふうん。それにしてお粗末だったな」

「諜報役でしたからね。獅子崎に心酔していた者の一人でした」

「なるほどね……」

煬介がもつとも優先すべき使命は、獅子崎一派の掃討である。

そのためなら手段は選ばない。汚い手を使おうが、相手を騙そうが、構いはしない。利用できるものは利用し、確実に殺す。

そんなことに一々躊躇いはしない。一度殺すと決めてからは、煬介はそれを必ず遂行する。

本当は女を連れ帰り尋問にかけてから殺すつもりだったので、連中の居所を探るのが振り出しに戻ったのは痛手だった。

「いや、待てよ」

「どうしました？」

「……夜の字。赤坂の堀の近く、調べたか？」

「赤坂御所の外縁のあたりですか？ いえ、まだ」

「その首の持ち主な、都電の線路に放置してきた。死体を回収しに連中が来るかもしれねえ……」

夜彦は赤坂の方角と思しき向きを一瞥すると、答えた。

「彼女が殺されたことを、彼らはまだ知らないという可能性の方が高いのでは？」

「死体……もとい同志に対しての連中の動向を見張ってりゃ、奴らがどういう計画で誘拐を企んでいたか見えてくるぜ」

「それを、今から私に調べると」

「早い方がいいだろ？」

夜彦は眉根を寄せた。明らかに嫌そう。

「運が悪けりゃ、死体が一体増えることになるかな」

獅子崎たちに鉢合わせたら、次に死ぬのは夜彦であろう。

「度胸試しにしてはスパイスが効き過ぎですよ……狗堂どの、つい

て来て下さい」

「てめえの身くらい、てめえで守れ」

「あなたの後始末で殺されるなんて真っ平御免被ります。あなた流に言うなら……てめえの尻はてめえで拭いて下さい」

焔介は舌を出した。

「いいぜ、ただし変装してからな」

「待ちましょう」

がんとして一人で行く気はないと見せつけんばかりに、夜彦は壁に背を預ける。

焔介は嘆息すると、変装道具の隠し場所目指して駆け出した。

「9 / 9」

1・1932 東京殺人奇談・前篇

「9 / 9」

さて、ミキは夜彦を連れて、再び赤坂御所の堀沿いを歩いていた。
「たしか、このあたりと……」

街灯はあつて明るいが、延々と変哲もない塀の風景が続くため、
橋を頼りに探すしかない。

「おミキさん、あれを」

長身の夜彦が視線の先に見つけたものは、道の上、行く手を阻む
ような黒い影であった。

「よくも騙くらかしてくれたものだ」

獅子崎の声ではなかったが、その一味のものであるのは容易に知
れた。ミキは挑発するように鼻で笑う。

「はて、何のことかえ」

「戯言を！」

気配が増える。二つ、三つ。隠し切れぬ殺気の渦が、夜闇に紛れ
ることなくはつきりと己を主張する。

馬鹿が。

「のこのこと、戻ってきよったのが運の尽きよ！」

それはこちらの台詞だ——とはミキは口にしない。

代わりに、下段から振り上げられた刀の軌道をなぞるように右手
を差し出し、相手の脇の下に潜り込む。着物の襟首と袷を取ると、
そのまま肩で押し倒した。敵は後頭部を砂利道に強打し泡を吹く。

その喉を踏み抜いてとどめを刺すと、距離を測りかねていたら
し刀を構える二人目に向かって地を蹴った。どこからか発砲音。だ
が、この薄明かりとミキの速度では、命中させられまい。二人目に
追いつくと、また先と同じように懷に飛び込んだ——いくらか一
人目より若く俊敏だったこの二人目は、倒される際に刀を諦め、両

手で地をついた。

ぱん、ぱん、と銃声。起きあがったミキは後ろ手に落ちていた刀を拾う。脚を地面に投げ出した姿勢のまま――否、足で敵を押さえつけた形のまま。

まっすぐその右の大腿部を貫く。苦悶に歪む覆面から覗く目と、くぐもった声。地面に釘付けとなった二人目に刀を刺したままに、三人目を探す。

しかし、場は沈黙していた。

警戒しつつも不思議がつていると、乾いた音が辺りに響いた。耳を澄ませれば銃声ではなく、拍手の音だ。

「お見事」

近づいてきたのは夜彦だった。

「おめー今まで何処にいたんだ？」

半眼で尋ねると、夜彦はすぐそばの崖の下を指さした。池のほとりだ。

「隠れていましたが」

「一緒に戦えよ……」

「あなたの邪魔をしない方がいいと判断しましたので」

夜彦は一人目の死体を検分しに行く。それを眺めながらミキは呟いた。

「もう一人いたが、そいつは何処に行ったかね？」

「獅子崎のところに、報告に戻ったんでしょね」

「追わなくても？」

「問題ありません。既に手配はしております」

そんな間があったかと思うが、夜彦が言うのだから大丈夫なのだろう。連絡役は諜報部隊の筆頭者だ。そういう面では、当然だがミキは夜彦を全面的に信用している。

「女の死体はどこに？」

「ここじゃねえ。もっと向こうの……線路が通っている方だ」

「それはまた、人目に付きそうなところにやってくれましたね。も

「う誰かに見つかったっているかもしれませんよ」

その割に人事のような口調だ。ミキは嘎れた声で応じた。

「わりに文句をお言いでないよ」

淡々と会話を進める間に、ミキの身体の下にいる刺客の顔から血の気がどんどん失せていく。固定された右大腿部から溢れた血は、辺りを鉄の臭いに染めていた。

「死にたいか？」

ミキは尋ねた。刺客は起き上がる力すらもない様子で、ただ身じろぎをしたただけだった。

ミキの刀は太い血管を貫いている。出血死に至るのは時間の問題だった。しかし、やがて意識が無くなるまで苦しみを味わうことになるのは避けられない。意外にも、こいつは先の女のように自害用の薬を持っていないらしい。時折もがくように動く胴体の上に、ミキは座り込んでいる。

「質問に答えるなら、とどめをくれてやっても——」

そこに、きらりと光る何かがミキの目に射した。

鏡の反射光だ。それ以上の何かを判断するより早く、警告が飛ぶ。

「ミキさん！」

ミキは舌打ちひとつ身を引いた——その反射速度が速いといっても、限界はある。

銃声と同時に、破裂するように割れる音。顔を覆うように広がった激痛に、声をあげそうになって——すべき行動をとる。

手に持っていた刀を引き抜くと、地を蹴った。

暗闇の底、右目がそいつを捉えていた。

転がるようにして崖を下り、敵が自分を探しているうちに肉薄すると、刀で首の骨を叩き折る。

「っ——いらん手間を、かけさせ、やがって」

「大丈夫ですか？」

「いってえー……」

全力疾走のおかげで息が弾んでいる。いや、それだけのせいでは

ないだろうが——顔に手をやると、ぬるぬるとした血の感覚があった。つけていた面は砕けたらしい、左半分だけになっていたそれを外すと、煬介は右瞼に指を潜らせる。

「怪我は——」

夜彦のいる道の上にまで戻ると、彼はぎょっとしたように言葉を切った。街灯の明かりの端だけが及ぶ立ち位置の煬介は、まるで右目を自らえぐりだしているかのように見えるだろう。

“それ”に傷がついていないことを確認し、煬介は無造作に、それを元あるべき眼窩に戻した。

「……その目は？」

「義眼だ」

低く答えると、続いて顔の損傷部を探す。痛みと出血の割に傷に広がりはない。視界もはつきりしている。細かい傷はいくつもあるが、出血は右目と耳の間、縦に走った傷が大元のようなうだ。

「そっちはどうなんだ」

夜彦の足元で、鮮血に染まった足を投げ出して横たわる刺客を一瞥する。

「沈黙しましたよ」

刀を抜いたせいで失血が早まったのか、浅く速かった呼吸が収まりつつある。昏睡に入ったらしい。もう、言葉を交わすのは無理だろう。

「結局手がかりなしか……」

「まあ、標的は減りましたから大収穫ですよ。どのみち情報を抜くのは我々の仕事ではありません」

「そうだな」

現れた刺客は全員を倒した。これ以上ここにとどまる理由もあるまいと、踵を返そうとしたところに夜彦が声をかけてくる。

「傷の手当は要りませんか？」

「そんなに大したもんじゃねえよ」

疼くような痛みはまだ続いているが、出血は収まりつつある。片

手をひらひらと振って、煬介は今度こそ夜彦に背を向けた。

「報告は頼んだ」

「了解しました」

とんだ夜になったもんだと、煬介は血塊まじりの鼻をかんだ。

人間、多少の痛みなど気にしなくても良いように出来ている。

怪我を負ったことよりも、鬼天狗の面を失った方が、煬介にとつては痛手であった——他の変装道具はどうとでもなっても、面だけは作り直すのが骨だった。金の問題もあるし、ミキ婆さんの顔を復元しても、微妙なずれが生じよう。

もう一つの感傷的な理由に関しては、煬介は忘れることにした。執着は判断を鈍らせる。あつたとして、何の美德にもならない——今は亡い、祖父の形見などと。

未明に訪れた夜彦の報告によれば、殺害した彼らは行方をくらませた監視役であった。つまり監視役すら忍天狗を裏切っていたのだ。どつりで事がこちらの不利に運ぶわけである。夜彦は、御山により忠実な監視役を呼び寄せると言っていたが、これで獅子崎を追いつめる準備が進めばよいのだが。

そんなことをぼんやり考えながら、仮眠を取った煬介は下宿から出、既に日も高くなつた帝都の通りをぶらぶらと歩いていた。

紫に関しては何の話も出なかったから、多分あの後彼女は無事に家へ送り届けられたのだろう。今の煬介にとつて、幼なじみの少女はその程度だった。思い出を反芻したり懐かしんだりといった、心の動きは不思議と出なかったからだ。

唐突に、目の前でタクシーが止まる。道を渡ろうとしていた煬介は非難の心地でそれを見た。車の後部座席の戸が開く。現れたハング帽の男に、煬介は目を剥いた。

「よう、やってくれたじゃねえか」

「お、オジキッ」

慌てて距離を取ろうとしたが、腕を捕まれ、逆に車に引きずりこまれる。タクシーは戸を閉める間も惜しいと言わんばかりに急発進した。

「おっと、途中下車はお断りだぜ」

首筋に添えられた刃物に、煬介は思わず苦笑した。

「白昼堂々、よくやるなあ……」

運転手も、もう一人後部座席に座っている乗客も、グルなんだろう。溜め息一つ、煬介は言いなりに、後部座席の真ん中、二人に挟まれるように移動させられる。ついでに、着物にしこんだあらゆる道具や凶器を抜かれる。これで煬介は丸腰だ。

「おめえは都会の手口にや慣れてねえな。こうあっさり捕まるたア、草葉の陰で狗堂のじいさんが泣いてるぜ」

そういつてハンチング帽を脱いだ男——獅子崎はにやりと笑った。

「余計なお世話だ」

「それで。何から訊かれない？」

「まずは昨日の感想から」

平坦に皮肉を答えると、獅子崎は顔をしかめた。

「そいつは俺が答えるもんじゃねえのか？ …… まあいい、おまえとの問答は狐に化かされたい馬鹿がするもんだって、昨日でよく分かったからな—— 単刀直入に聞くぞ、日野のお嬢さんは何処にやった？」

「自宅じゃねえのか？」

訊き返すと、獅子崎は肩を竦めた。

「昨晩は帰っていない」

なるほど—— 夜彦が紫の話題を出さなかった理由を、煬介は理解した。

こうやって、予期しないところから獅子崎たちに情報が漏れるのを防ぐためだ。

「俺が知るわきゃねえだろう」

「それで通じると思ってたのか？」

獅子崎は、煬介の顔のガーゼを乱暴に剥がした。痛みに顔を歪ませる煬介に構わず、塞がりきらぬ傷口に刃を立てる。

「……言おうが言うまいが殺されることが分かっている、そう簡単に話すかよ。……現役引いてしばらく経ってるんだ、随分ヤキが回ってんぜ、オジキよ」

「……言いたいことはそれだけか？」

「でっ」

顔の傷口に刃が突き刺さる。ただでさえ皮膚の薄いところだ、涙目になりながら獅子崎に顔を向けていた煬介は、そこでにいと――

――実際にはぐいと――口角を上げた。

「言いたいことならまだあるぜ」

――尻の下敷きにしていた右手を引き抜く。

「俺の“獲物”くらい知つときな！」

煬介は振り返りもせず、獅子崎側と逆に座す、後部座席のもう一人の男の喉に、指を突き立てた。下顎を掴み上げる。くぐもる息。

獅子崎のナイフから身を引き、そのままぐりと男の体と自身を入れ替えるように、狭い車内をドア側に移動すると、乱暴にそれを開いた。

「てめえ――」

「じゃ、また会おうぜ」

気軽に左手で手を振り、男の喉から右手を引き抜いて、煬介は車から身を投げる。

あちこちをコールドールで舗装された道路にぶつけるようにして何回転も転がった。痛む身体に鞭打って、対向車が走ってくるより早く起き上がると、脱兎のごとく歩道を駆け出す。後ろを振り返る余裕はない。

腕組む男女の脇をすり抜け、使いの小僧を追い抜いて、橋を渡り、人ごみを走り抜ける。追ってくる気配はなかったが、とにかく獅子崎たちの見えぬところまで行かねばならない。今度こそ捲かねば。

無我夢中で駆け込んだ喫茶店の戸を背に、これを隔てた道に走る足音がないのを確認して、煬介はようやく息をついた。

「あれっ、奇遇だね」

かかった声にどきんと胸が鳴った。眼を見開いてそちらに向けると、ソファ席から身を乗り出し、陽気に手を振る日下部の姿を見つめる。煬介は全身から力が抜けるのを感じた。

「こんなところで、狗堂君に会うなんて。何をしてたんだい？」

「ちよつとな……」

そちらに歩み寄りながら、煬介は今更のように全身を苛む痛みに顔をしかめた。思考力が徐々に戻ってくる。ぼんやり、煬介は紫の事を思い出した——ああ、そういえば彼女の身柄は、実家でなく婚約者に渡したのだった。因幡とかいったか、彼の家に身を寄せていてもおかしくはなかったな——そこまで考えて、日下部の席に辿りつく。彼は、眼鏡の奥の真ん丸にした目でじろじろと煬介を検討している。

「随分、薄汚れているじゃあないか」

「貧乏生活なもんでね」

適当に返事をしながら埃を払うと、追加の注文を取りに来た店の女中が嫌そうな顔をした。愛想笑いをして、煬介は日下部の正面のソファに腰を下ろすと、とりあえずコーヒーを注文する。昨晚から何も食ってないので空腹は限界だったが、今ここで物を胃に入れたら、多分吐く。

女中が持ってきたナプキンでさりげなく右の顔を押さえていると、日下部は「ところで」と、好奇心まるだしの顔で新聞を広げた。

「これ、今朝のやつなんだけどね。きみ、これを見たかい？」

「うん？」

日下部が広げた一面にはこうあった——“奇奇怪怪なる自殺か殺人か、都電線路に女の首無し轢死体”。

頬を引きつらせる煬介。顔を紅潮させた日下部は、それにも気づかず興奮したように言葉を繰った。

「全く面白いもんだと思わないかい。や、人死を喜んでいるわけはけてないのだがね。今度は首無しだよ！ ……記事によれば警察は、事故のせいで首がお堀に落ちてしまったと分析しているらしいが、人間の首がそんな綺麗に飛んでいくものかね。この前の女学生是件といい、これも猟奇殺人の一つに違いないと僕ア睨んでいるんだが！ きみはどう思う？ ……おや、顔のところ、どうしたんだい？ 何だか怪我をしているようだけど」

卓に身を乗り出し、唾を飛ばしていた日下部が首を傾ぐ。煬介はナプキンが赤く染まりつつあるのを見てとると、笑んだ。呟く。

「よくあることさ」

それはそれは、疲れた顔で。

「一章了」

「9/9」(後書き)

一章了です。次回から二章に入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5373v/>

忍天狗【第二部】

2011年10月20日03時13分発行